NEWSLETTER

生態人類学会

ニュースレター
No. 22

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

2017 年 1 月 12 日発行

【研究報告】

□ モンゴル高原における馬乳酒製造・流通の現状について（尾崎孝宏） ・・・ 2

□ 「ガボグ」が生み出す贈与―パプアニューギニア・カルヴァドス諸島の葬儀における財貨の贈与儀礼から―（門馬一平） ・・・ 5

□ 魚の動きを読む―ケニア共和国の海村における網漁を事例として―（田村卓也） ・・・ 9

□ 薪利用を通して植物を知る：ケニア牧畜民マサイ女性の在来生態知の個人差について（田暁潔） ・・・15

□ カメルーン東部州狩猟採集民バカの女性による植物性食物の分配と社会関係（関野文子） ・・・20

□ アンデス牧畜民村落における住居の分布と季節移動（佃麻美） ・・・24

□ 視覚メディアを用いた人類学的方法論についての考察―写真を用いたエスノグラフィーの作成（岩谷洋史） ・・・28

□ 山梨県の中山間地におけるこれからの生活に関する一考察（小笠原輝・池口仁） ・・・33

□ 徳島県西部山間地におけるイモ類の貯蔵技術（成澤徳子・宮田寛章） ・・・36

□ なぜ家畜飼育と農耕をともにするのか―内モンゴルの定住牧畜民の事例から（フフアグラ（青山）） ・・・41

□ バカ・ピグミーのキャンプ跡に再生した野生ヤム個体群の遺伝系統分析（安岡宏和・Laure BENOIT） ・・・46

□ 滋賀県高島市朽木のトチ餅づくりにおける灰の入手をめぐる課題（八塚春名） ・・・51

【会計報告】 ・・・54

【インフォメーション】

第 21 回研究大会の報告、新入会員情報、2016 年度の運営体制、第 22 回研究大会のお知らせ

【編集後記】

【研究報告】

モンゴル高原における馬乳酒製造・流通の現状について

尾崎孝宏
鹿児島大学法文学部

1. はじめに

本稿は、モンゴル国および中国内モンゴル自治区における馬乳酒（アイラグもしくはツェゲー：名称には地方差あり）の製造・流通について、以下の 3 点から論じる。

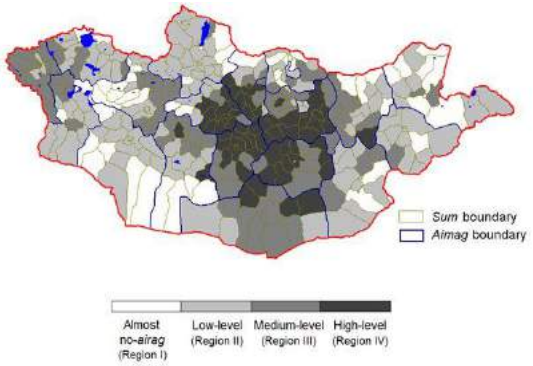
1)前近代から現在までの、馬乳酒の製造地域に関する空間的な偏差
2)馬乳酒の地域社会内での位置付け
3)商品としての馬乳酒の販売・流通の開始と現状

馬乳酒とは、馬乳を撹拌して乳酸菌発酵およびアルコール発酵を進行させた非加熱醸造酒であり、製造地域はモンゴル高原のほか、カザフスタン・キルギスなどの中央アジア地域、ロシアのサハ・タタールスタンなどユーラシア大陸北方域に限られている。なお、乳酒が生産される季節は搾乳が盛んにおこなわれる夏季から秋季にかけてであり、これは馬の搾乳期間と一致する。

2. 馬乳酒生産地域の空間的偏差

馬乳酒は、以前よりモンゴル高原内部でも生産状況に地域的な偏りが存在することが指摘されてきた（平田 1993）。

モンゴル国における馬乳酒生産の地理的偏差については、筆者らの共同研究プロジェクトにおいてバトオヨンが 2012 年冬に、自身が所属する気象水文局のネットワークを通じてモンゴル全国の 329 郡から各地の馬乳酒生産に関する質問紙調査を実施した（Batoyun et al 2015）。その結果、中部から南部にかけて生産者数の割合が高く、また生産期間の長い地域（Region IV）が分布していることが明らかになった。



図：モンゴル国における馬乳酒生産状況

馬乳酒生産の空間的偏差は、単純にウマの飼育頭数の多寡から説明できるとは限らない。例えば東部ではウマは多いが、競馬用のウマの育成を優先するため、馬乳酒の生産に労働力を振り向ける余裕はないと考えて馬乳酒の生産は稀である。

一方、南部のゴビ（乾燥草原）地域ではウマは少ないが、馬乳酒が民俗的な儀礼と密接な関連を有しているため、馬乳酒が盛んに生産されている。すなわち、環境的要因のみならず、現地の文化的嗜好性によって馬乳酒の生産が左右されている。

3. 儀礼食と健康食

モンゴル国における馬乳酒の位置づけは、儀礼食と健康食に大別される。前者はモンゴル競馬の表彰式や、旧正月などの儀礼的な機会に必須のアイテムとして消費されるものであり、歴史的には儀礼食としての消費が生産地域と関連していたと思われる。この点はモンゴル国と比較して生産地域が

より限定的である内モンゴルにおいて、数少ない生産者が王侯や仏寺といった儀礼主催者であるケースが多い点からも支持されると思われる（梅棹 1990）。

一方、現在の都市部で消費される際の馬乳酒の位置づけは、高血圧などに効果のある健康食である。こうした位置づけは近代国家が馬乳酒を一種の薬として扱ったことから広まったと推測されるが、馬乳酒生産地域のうち、モンゴル国におけるハンガイ（森林草原）地域など、旧来より生産期間が長く、生産量も突出して多かった地域においては、1 人の牧民が 1 日に 4 リットルの馬乳酒を消費していたという報告も存在する。そのため、こうした地域の消費の在り方が夏の健康食としての馬乳酒消費のルーツにあると推測される（石井 2010）。

4. モンゴル高原における馬乳酒の流通

モンゴル高原においては前近代より、畜産品は自給的消費のみならず、域外への交易品としても機能していた。ただし 20 世紀前半の状況についてみると、少なくともモンゴル高原から域外への流通品目の中に、馬乳酒を含む乳製品全般が含まれていなかった。馬乳酒は必ずしも自家消費に限られはしないにせよ、歴史的には極めてローカルな範囲で消費されてきたと考えられる。

モンゴル国に関しては、1950 年代以降に急速に都市化が進行する。こうした現象の背景には地方在住者の都市部への移住が存在したが、その中には当然のように乳酒を嗜む地域の人々が含まれていた。彼らの親族のうち一部は、出身地で乳酒へのアクセスを保った生活を継続しており、これが都市への馬乳酒の流通を開始させる潜在的な要因として機能したと考えられる。

その上で、発酵が継続しており、輸送が決して簡単ではない醸造酒である馬乳酒を、近代的な輸送・通信手段を持つ農牧業協同組合が主体となり、1950 年代末頃より都市向けの商品として販売・流通を開始した。

1990 年代の社会主義崩壊以後、公的な機関が大々的に馬乳酒を生産地から集荷し、都市部へ輸送することはなくなった。一方で首都ウランバートルは一層の地方出身者を抱えつつ人口増加を続け、潜在的な需要は着実に拡大していた。こうした状況で、都市郊外の牧民世帯による小規模な馬乳酒の生産と供給が開始した。

現在、モンゴル国における牧民の経営戦略は、都市に近い郊外と遠く離れた遠隔地に二分化している。その中で郊外は、家畜生体やカシミア、皮革に加えて馬乳酒を含む乳製品など多様な畜産物を販売して現金収入を得ている点に特徴がある。

5. 内モンゴルにおける状況

一方、中国領となった内モンゴルでは政府が都市への人口流入を厳しく制限しており、都市域の拡大が顕著になるのは 2000 年以降の積極的な開発政策の導入以降である。また元来、内モンゴルでは限られた地域でのみ馬乳酒が生産されていたこともあり、馬乳酒の広域的流通が開始する契機には乏しかった。

ただし各種の要因により、1980 年代初頭より始まる人民公社の解体によって物流が民営化されると同時に、中部シリンゴル盟内限定ではあるが都市部への馬乳酒の販売・流通が開始したことが確認されている。

なお現在の内モンゴルにおける牧畜戦略

についても、モンゴル国とは若干異なるものの郊外と遠隔地という空間の二分法が成立している。そして馬乳酒の販売・流通に関わっている牧民は郊外在住者、もしくは郊外への移住者に限られている。

なお、内モンゴルで馬乳酒の販売・流通を大規模に行っている牧民は、多くがメスウマの搾乳と放牧を担当する労働者の雇用と、15 分で 1000 回撹拌できる馬乳酒製造機の導入が常態化しており、その意味で馬乳酒は郊外の富裕な牧民にとっての選択肢の１つとして位置付けうる。

写真：稼働中の馬乳酒製造機

6. おわりに

今後の馬乳酒の生産・流通に一定の影響を及ぼすと考えられるのが、モンゴル高原全域で見られる、馬乳酒の味に対する嗜好性の変化である。

馬乳酒は非加熱であり保存中にも発酵が進行するため、今でも遠隔地で飲まれている馬乳酒は発酵が進んだ、非常に酸味の強いものが主流である。しかし、地方政府主催の「馬乳酒コンテスト」で入賞する馬乳酒は往々にして低発酵の酸味の弱いものであり、都市民が好む馬乳酒も同様の傾向となっている。またその結果、内モンゴルでは販売地である都市へ馬乳を持ち込み、そこで馬乳酒を製造している事例もある。

モンゴル国においては郊外の草原での生産が主流であるが、今後は遠隔地から冷蔵貨物車などで馬乳を都市などの定住地域へ運搬し、そこで馬乳酒を生産し始める可能性がある一方、そうした資本のない遠隔地の生産者が「売る手段がない」という理由で自家生産を最小限に抑える、もしくは生産を取りやめる可能性が中長期的には想像され、それが馬乳酒生産の空間的な偏差を増幅する可能性がある。

また内モンゴルにおいては、今後馬乳酒のマーケットが拡大し、郊外と遠隔地の輸送コストの差が小さくなれば、遠隔地の牧民にとっても選択肢として開かれる可能性がある。ただし既にウマが少ない現状で、彼らの牧畜戦略に大きなインパクトを与えうるかは不透明である。これらの点について、今後の追加調査が必要であろう。

参考文献

Batoyun, T., D. Erdenetsetseg, M. Shinoda, T.Ozaki and Y. Morinaga 2015 “Who is making airag (Fermented Mare's Milk)?: A nationwide survey on traditional food in Mongolia”, *Nomadic Peoples*, Volume 19, Number 1, pp.7-29

平田昌弘　2013　『ユーラシア乳文化論』東京：岩波書店

石井智美　2010　「モンゴル遊牧民の職の変容―1 家庭の事例から―」『沙漠研究』19(4)：537-543

梅棹忠夫　1990（1952）　「モンゴルの飲みものについて」『梅棹忠夫著作集　第 2 巻　モンゴル研究』東京：中央公論社、pp.353-379（初出：ユーラシア学会（編）『遊牧民族の社会と文化―ユーラシア学会研究報告』177-200）

「ガボグ」が生み出す贈与
―パプアニューギニア・カルヴァドス諸島の葬儀における財貨の贈与儀礼から―

門馬一平
北九州市立大学社会システム研究科

１．はじめに

パプアニューギニア・カルヴァドス諸島では葬儀において、故人と親しかった者や親族が集まり、財貨である石斧や貝のネックレスを用いた贈与儀礼が何度も行われる。繰り返し行われる儀礼において、財貨は人の手から手へと渡り、集まった人たちの興奮は最高潮に達する。こうした贈与は「与える」「受け取る」という二者間において互酬的な形式でなされるが、直接的な理由として人びとを贈与へと駆り立てているものが「ガヴォグ」と呼ばれる概念である。ガヴォグは、故人が触れたもの・故人の記憶・負債関係などに対して発生すると説明される。これは日本でいうところの「ケガレ」もしくは「業」に当たるようなものだと考えられる。さまざまな贈与儀礼は「ガヴォグをクリアにする（解消する）」ためにおこなうものだと言われる。このガヴォグという概念から、二者間の互酬性だけでは説明できない、人びとが贈与行為へと乗り出す理由を読み解く。

２．調査概要

調査では、パナティナネ島のカロタウ村に 2012 年～2015 年にかけて計 10 ヶ月間滞在した。カルヴァドス諸島は大小の島々が連なっており、贈与儀礼の際はセーリングカヌーを使ってそれぞれの島から人々が集まってくる。カロタウ村の人々も別の村や島で開催される贈与儀礼に年 10 回ほど参加している。調査者はカロタウ村の人が参加する贈与儀礼に従事し、参与観察および聞き取り調査をおこなった。

３．葬儀と贈与儀礼パマリ

葬儀は埋葬後、1 週間～1 ヶ月の間におこなわれる。葬儀の主催者（tosagae）となるのは、故人の母方の伯父か故人の息子である。カルヴァドス諸島は母系社会だが夫方居住婚が一般的である。普通は個人の母方クランが葬儀を主催するが、息子が主催した場合は故人のクランと主催者のクランが異なることになり、息子は父のクランに対して葬儀を主催したことの対価として、現在住んでいる父の土地を要求することができる。

主催者は故人の親族（tontonuwage ）や姻族（towelam ）、交易のパートナー、そして故人の父方の叔父、もしくは父方の交差いとこに、葬儀へ来るよう招待しなければならない。故人の父方の叔父はこのサガエにおいて主賓（tohansagae ）となる（図１）。招待するのと同時に、主催者は饗宴に必要なものを親族や交易パートナーなどの関係性を使って集めなければならない。饗宴に必要なものとは主に財貨であり、他に、ブタ、現金、土器、衣類や食器などの日用雑貨、農産物である。姻族、親族、交易パートナー、主催者はこれらのものを持ち寄り、生前故人と関係の深かった親族や友人などへと贈与する。そして最後に主賓である故人の父方叔父へもこれらのものを贈与する。主賓は、事前に主催者に対して、財貨を複数贈与する「バウィ（bawi）」とよばれる贈与儀礼

をしなければならない。最後の主賓へ贈与する財貨の多さは、このバウィの財貨の数で決まってくる。バウィの数が多ければ、主催者から主賓への反対贈与の量も増える。

こうした、故人と親しい親族や父方叔父に対してなされる贈与儀礼を「パマリ（pamari）」という。このパマリはケガレや業のようなものである「ガヴォグ（gavog）」をきれいにするといわれている。ガヴォグは遺体のあった場所や故人の使っていた物、服喪に用いた物に対して発生しており（表１参照）、こうしたケガレに類する事物に対して、パマリをおこなうことでそれを清浄化することができると言われている。

葬儀の前後には、直接葬儀と関係のないパマリも多数を行われている。村内でおこった様々な葛藤にもガヴォグは発生しており（表１参照）、葬儀に際して集まってきた財貨を利用して、彼らは次々と共同体内のガヴォグを解決していく。

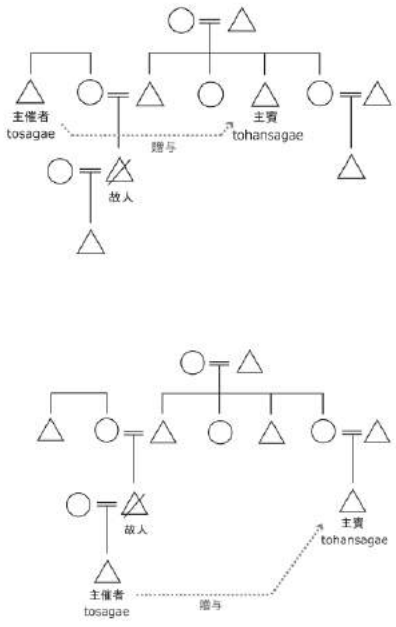


図１．主催者と主賓

４．生まれながらの負債

ここで、故人と葬儀の主賓について言及しておく。葬儀の主賓となるのは、故人の父方の叔父、もしくは父方の交差いとこである。こうした人々が贈与の対象となる理由について、カルヴァドス諸島の人々は、「彼（彼女）が幼いころ、父の兄妹たちが彼の面倒をみたからだ」とか「父の精子に対する支払い（Puk Maisane）」だと説明する。実際、母系社会において夫方居住婚であるということは、父のクランに育てられることを意味する。つまり、産まれたときから子どもは父のクランに対して負債を負っているのである。そのため、生前から父のクラン、特に父の姉妹の子どもに対して贈与を繰り返すこともある。

贈与儀礼の規模（贈与されるものの多さ、参加する人の多さ）、は故人の年齢や人間関係、主催者の人間関係によって決まってくる。故人の年齢が高ければ高いほど、彼の人脈やその中での負債関係も増えていく。そうした生前の負債の回収と支払いが彼の死と同時に一気におこなわれるのである。一方で、饗宴の主催者は故人の死を利用して自身の人脈と貸し借りを増やしていく。故人負債の清算が同時に生きている者の負債を生み出していく。これは、人が産まれ、死ぬ限り繰り返される、一つのシステムだということができる。

５．負債のネットワーク

Ａクランの男性とＢクランの女性が結婚し、産まれるＢクランの子どもは、Ｃクランの女性と結婚し、Ｃ クランの子どもが生まれる。Ｃクランの子どもはＡクランの女性と結婚し、Ａクランの子どもが生まれる。

実際にはより複雑であるが、このように血縁関係は延々と時間軸をつないでいく。そこに土地のやりとりや所有の問題が発生する。母系社会で夫方居住婚のため、夫クランに対して妻と子供のクランは日常的に負債を負っていることになるからだ。それを解決するのが財貨を用いた贈与儀礼である。贈与儀礼は、父、祖父との負債関係を参照しつつ、同時代に生きる父や祖父のクランとの関係性を保ち、負債関係や土地の問題を解決していく。こうして、財貨は親族、姻族を現在の空間軸で結んでいく。さらに、セーリングカヌーの発達と交易ネットワークの複雑化は、空間軸で親族、姻族の関係をより近くするとともに、それ以外の交易相手との関係性を築き、より規模の大きな儀礼を開催することを可能にした。たて（時間軸）に続く血縁関係と、よこ（空間軸）に広がる交易ネットワーク、その両方の結節点に贈与儀礼は位置している。

こうしたネットワークが作られるのは、贈与儀礼が二者関係ではなく、三者以上の関係性のなかでおこなわれるためである。故人の母方クランや息子は、故人の負債を肩代わりして儀礼の主賓に対して贈与している。つまり、生前に故人が築いた関係性は、彼のクランメンバーや息子にとっても重要な関係性であるといえる。人々は誰かと関係性を築くときに、その相手だけでなく、相手の家族やクランの人々とも関係性を築いていることになる。

７．ガヴォグについての考察

では、肩代わりまでして解消しなければならない「ガヴォグ」とはそもそも何であるのか。

寺島は、哲学者の今村が述べる「存在感情としての負い目」に言及しつつ著書「平等論」において、「シェアリングを駆動するものは今村が言うような根源的な負い目、『誰』とか『何』とか言えないものに対する負い目なのである。」（寺嶋　2011）と述べている。

カルヴァドス諸島の社会では、その負い目に「ガヴォグ」という名前を与えて事物に付与することで、死後に社会のなかで返済することを可能にしたのではないだろうか。人の生きることへの負い目＝社会性が、ガヴォグとして具現化され、贈与儀礼パマリによって解消されることで、彼らは故人が存在したことを表現しているのである。

表１．様々なガヴォグ

	発生の理由
母の果実	食べ物が豊富にあるためガヴォグが発生した。
手	親族が死去しため、手にガヴォグが発生した。手のガヴォグへの贈与儀礼は「手を洗うために行う」と表現される。
家の柱を抜く	死去した母の思い出のために家の柱を残してあった。その柱にガヴォグが発生した。兄から弟に贈与儀礼が行われた後、その柱を抜いた。
孫の思い出	孫が死去してから10年ほど髭を剃らなかったため、髭にガボグが発生した。
パマリの失敗	葬儀において手違いで贈与儀礼パマリを受けることができなかったAが、それ以来贈与儀礼の主催者の家にあがらなかったため、ガヴォグが発生した。
腕を切除した母	Aの母は以前、腕を切除するためにオーストラリアの病院へ入院した。Aはまだ幼く、別の家に預けられて育てられたためにガヴォグが発生した。
カヌー	故人のカヌーにガヴォグが発生。
さわれない同名の人	この地域のマナーでは、同じ名前の人にさわってはいけない。そのマナーを死ぬまでまもったことに、ガヴォグが発生した。
家	故人の家にガヴォグが発生。

参考文献

今村　仁司　（2000）『交易する人間　贈与と交換の人間学』講談社

寺嶋　秀明　（2011）『平等論　霊長類と人における社会と平等性の進化』ナカニシヤ出版

魚の動きを読む―ケニア共和国の海村における網漁を事例として―

田村　卓也
総合研究大学院大学文化科学研究科

1．はじめに

漁撈という生業は、不確実性がその大きな特徴として指摘される(Acheson 1981)。そうした不確実性をもたらす要因のひとつとして、対象となる生物が水中という人間にとって特殊な環境に生息しており、漁撈者がその姿を直接的に観察することが困難であるという点を指摘することができる。

本稿ではケニア共和国の海村で行われている置き網漁についての事例を報告する。漁を行う中において、漁撈者がどのような手掛かりから魚の動きを読み取り、漁の行い方に反映させているのかを、一か月間漁撈者のグループに同行することによって得られたデータを基に検討することが本稿の目的である。

2．調査地と調査対象

調査地となるのはケニア共和国沿岸南部、タンザニアとの国境付近に位置するワシニ島ワシニ村のワシニ集落である。大陸からボートで 15 分ほどの距離にあるワシニ村の総人口は 2014 年 12 月現在で 737 人、世帯数は 113 世帯である。主な住民はブンバ(Vumba)の人々で、いずれもイスラム教徒である。

ワシニ村においては、村の周辺で行われる小規模な漁撈と、島の南方海域に設定されたキシテ・ムプングティ海洋公園(Kisite-Mpunguti Marie Park)を訪れる観光客の受け入れに関わる観光産業が主要な現金収入源となっている。しかしながら、観光産業は時期的な観光客増減の幅が大きく、4 月から 10 月ころにかけては観光客数が減少するオフシーズンとなる。また、近年ケニア沿岸部においては、イスラム過激派によるテロの脅威のため、観光客数が大きく減少している。そのため、本調査を実施した 2015 年 6 月から 7 月にかけては、観光産業によって生計を立てている人々が十分な収入を得ることができず、都市部への出稼ぎや、村周辺での漁撈によって収入を得ている様子がみられた。

今回調査対象としたのは、このように時期的な現金収入獲得手段として漁撈を行っている人々が集まったグループである。このグループ参加者は、村内で小規模な宿泊施設を経営するAが漁網を新規に購入し、村内の友人たちに呼びかけて集まったものである。調査期間中、このグループにはAを含めて 6 名の参加者があったが、参加者らはいずれも観光ガイドや海洋公園へ向かう木造船のクルー、ダイビングインストラクターや船大工など、他の現金収入源を持っている人々である。参加者らはいずれも、これまで他の漁師が行う網漁を手伝ったことのある経験を持つが、本格的に網漁を行うのは今回が初めてである。

調査を実施したのは 2015 年 6 月 15 日から 7 月 14 日までの一か月間である。この期間中、調査対象グループ(以下、対象グループと略記)が行う漁にすべて同行し、その日の漁獲や出漁時間、出漁先、漁の進め方などについての記録と観察を行った。

3．網漁について

ワシニ村では現在、3 種類の漁網が使用されている。一つめはブルタ(buruta)と呼ばれる地引網である。二つめはウダー(udaa)とよばれる撚糸製の網で、潮間帯やマングローブ林を流れる川(mto)の河口などで行う置き網漁に使用される。三つめは対象グループが使用するウカノ(ukano)とよばれるモノフィラメント製の刺し網で、おもに水深 1.5〜3m ほどの浅い海での漁に使用される。ただし、ウカノは必ずしも水深のある場所だけで使用されるとは限らず、ウダーのように干潮時に水底が露出するような場所でも用いられることがある。実際、後述するように対象グループは調査期間中、一部の時期を除いて、潮間帯での漁にウカノを使用していた。

以上のようにワシニ村においては 3 種類の漁網が使用されているが、日常的にはそれぞれの種類を区別することは少なく、単に網(nyavu)と呼ぶ。3 種類の漁網のうち、ブルタとウカノはケニアの法令によってその利用が禁止されているが、沿岸部においては実質的な取り締まりは行われておらず、漁撈者によってひろく使用されているのが現状である。

調査対象グループは、複数の網を横につなぎ合わせて使用していた。網の全長はおよそ 300m、幅は 1.5m、網目は 6cm である。網の上部には 70cm ほどの間隔で市販のプラスチック製浮子(boya)が、下部には沈子として鉛製の板(risasi)と小石(jiwe)が取り付けられている。また、網の両端には目印としてペットボトル(chupa)と、網全体を固定するための大きな石(nanga)が取り付けられる。

ここからは、対象グループによる漁の行い方を、順を追って説明する。

4．出漁時刻と出漁先の決定

漁を行うにあたっては、まず出漁先と漁を行う時間が話し合いで決められる。ウカノの網入れを行うのは、満潮(maji yamejaa)後、潮位が低下していく時間帯(maji yanatoka)で、とくに干潮(maji yametoka)の 2 時間から 3 時間ほど前がもっともよいとされる。これより早い時間だと魚が網の両端から逃げてしまうため、十分に魚を囲うことができない。また、それよりも遅すぎると魚がすでに沖側へと移動してしまっているため、あまり多くの漁獲を期待することができないという。目の前に海が広がるワシニ村では、集落の中から容易に海の様子を観察することができる。参加者たちは目の前の海の様子を見ながら、当日あるいは翌日の潮汐の変化を検討し、漁を行う時間を決定する。

出漁先の決定にあたっては、参加者たちは島周辺の海の様子や、他の漁撈者の動向を踏まえながら、魚の移動を予測し、漁場を決定する。図 1 は、調査期間中に漁が行われた漁場の位置と名称を示したものである。漁が行われた 10 か所の漁場のうち、9 か所(②〜⑩)が島の北側に位置しているが、このように利用された漁場が北側の集中しているのは、自然環境の季節的変化が大きく関係している。スワヒリ海岸とよばれる東アフリカ沿岸部の一帯では、季節ごとに方向を変えるモンスーンの存在が、天候や海況を大きく変化させる。地域によってその時期には若干の差異がみられるものの、ワシニ島周辺では 4 月から 11 月ころに南西

風(kusi)が強く吹き、この時期には海況が荒れやすくなる。一方で 12 月から 3 月ころにかけては北東風(kaskazi)が吹き、この時期には海況が比較的穏やかな日が続く。調査時には南西からの非常に強い風の影響により、島の南側では荒れ模様が続いていたが、北側の海は島影が風や波を遮るため、南側の海に比べて穏やかであった。このようなコンディションでは、風で水面が揺れるのを嫌がる魚たちが風と波が穏やかな北側の海に移動してくることがあるため、南側の海に比べて大漁を期待することができると、対象グループの参加者たちは説明する。こうした背景から、対象グループは島の北側を中心としながら出漁先を決定していた。

もう一点、出漁先の決定で重要なのは、たとえ大漁であっても、同じ場所での漁を連続して行わないということである。これは、同じ場所で連続して網入れを行っていると、魚たちが異変を察知して逃げてしまうためであるという。そのため、出漁先を決める際には自らが同じ場所で漁を繰り返さないようにするだけでなく、他の漁撈者が直近に網入れを行った漁場を極力避けるようにして漁場を決定する様子がみられた。

以上のような出漁先の決定にあたっては、自らの直近の漁獲の推移や、魚群の目撃といった直接的な経験によって得られる情報に加え、他者からもたらされる情報が重要な判断材料となる。村の中では、漁撈者の間では、その日の漁獲や海の様子についての情報が、日常会話の中において頻繁に交わされている。対象グループの参加者たちは、他者からもたらされる島周辺の広域的な海況の変化や、他の漁撈者がどこで、どのような漁獲を得たのかといった情報を手掛かりとしながら、島周辺における魚の移動を検討し、出漁先を決定する。

5．網入れ

漁場に到着すると、船上から網入れが行われる。網入れに使用する船は、おもにAの所有する船外機付ボート(dinge)であったが、村前の海で漁を行う際には他の漁撈者から刳り船(kidau)を借りることもあった。

網入れを行う際には、次の二点に関して特に注意が払われていた。

第一には、それぞれの漁場において、その日どの程度まで潮が引くかという点を考慮し、干潮時に波打ち際となるあたりに網を

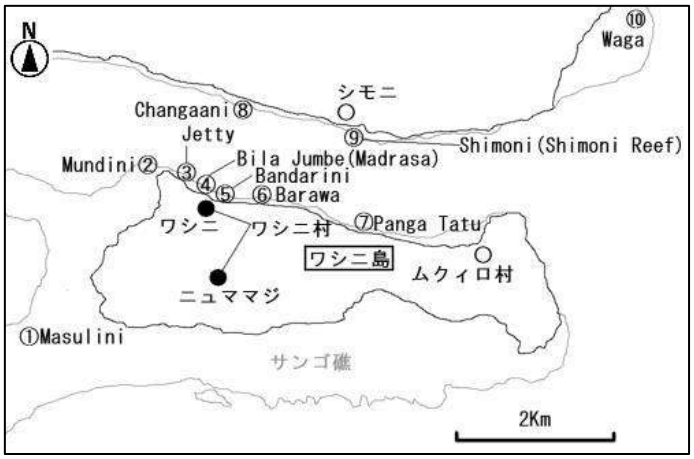


図１　対象グループの利用した漁場

入れるという点である。どの程度まで潮が引くかは、その日の潮汐や漁場の地形によって大きく異なる。網入れ場所が干潮時の波打ち際よりも沖側だと、水深があるため魚が網の両端から逃げてしまう可能性があり、十分な漁獲を期待することができない。また、陸側だと早い時間に水底が露出してしまうことから、多くの魚を囲むことができず、同様に多くの漁獲を期待することができないという。このように、干潮時に波打ち際となる場所に正しく網入れを行うことが出来るかどうかは、漁の成功の可否を左右する大きな要素と考えられている。

第二には、漁場周辺の狭い範囲における魚の動きを予測した網入れを行うという点である。対象グループの参加者らによると、潮が満ちている時間帯、魚たちは陸側の藻場(nyasi)やマングローブ(koko)の周辺にやって来て、餌を食べたり、身を隠している。やがて、魚たちが潮位の低下と同時に沖側へと移動していく際には、とくに魚が多く通る岩礁やサンゴ礁の切れ目があるといい、こうした場所はムランゴニ(mlangoni)と呼ばれる。ムランゴニを塞ぐように網入れを行うことによって、より多くの魚を漁獲することができる。先に述べた第一の点が陸からの垂直的な網入れ位置の決定に関わるものであるのに対して、第二の点は陸との並行的な位置の決定に関わるものであるといえる。

以上のような網入れ場所の決定では、それぞれの漁場の地理的な特徴を把握しておく必要がある。しかしながら、はじめて網入れを行う漁場においては、漁場の状況を十分に把握していないため、網入れを失敗することも少なくない。

6．網の片付けと漁獲の販売

漁を終えると網を片付けて帰村するが、深夜に漁が行われた際には、暗くて作業が行いにくいことから、網はそのまま放置され、翌朝以降の干潮時に徒歩で片付けを行う。このように翌朝以降に片付けが行われる場合、漁を終えた後に再び潮が満ちることから網に魚が掛かっていることがある。しかしながら、参加者らによると、放置されている網の周辺には魚が寄って来ないため、あまり多くの漁獲を期待することはできないという。

漁を終えた後には漁獲が村の仲買人へと販売される。村での魚の取引金額は、仲買人が魚を卸すシモニの町の魚市場での取引価格とともに季節的に変動する。仲買人は0.5kg単位で魚の重量を計り、買取金額を決定する。魚の価格は魚種により異なり、ニセクロホシフエダイ(tenbo)やマトフエフキ(dizi)などが最も高値で取引されていた。調査期間中には29魚種が漁獲され、網に掛かったサメ(papa)の幼体とハリセンボン(bunju)以外すべての魚種が一キロあたり約55円〜264円の範囲で販売された。販売で得られた利益は、船の燃料代などの経費を差し引いて、参加者内で均等に分配される。

対象グループの参加者たちにとって、漁を行うことは現金収入を得るだけでなく、自給的な食料獲得手段としても重要な意味をもつ。調査期間中には計184kgの漁獲があったが、そのうちの約 36％にあたる65.5kgが参加者内で分配され、自家消費に回された。また、漁獲が少ない日には販売よりも自家消費する分の魚の確保が優先して行われる。ある程度の漁獲量があった日に

は、販売金額の安い魚種が優先的に自家消費へと回された。

7．潮汐と対象グループの活動

最後に、潮汐の月周性と対象グループの活動との関係性を示す。表 1 は調査期間中における対象グループの活動と、潮汐の変化を示したものである。

表 1　対象グループの活動と潮汐

日	潮汐	活動	日	潮汐	活動
6月15日	大潮	2回(⑤、④)	6月30日	大潮	網の修繕
16日	大潮	2回(④、②)	7月1日	大潮	1回(⑥)
17日	大潮	2回(②、⑨)	2日	大潮	2回(⑩、⑥)
18日	大潮	1回(⑥)	3日	大潮	1回(⑥)
19日	中潮	1回(④)	4日	中潮	1回(⑨)
20日	中潮	1回(②)	5日	中潮	1回(⑧)
21日	中潮	網の修繕	6日	中潮	2回(⑦、⑥)
22日	中潮	1回(⑥)	7日	中潮	1回(⑥)
23日	小潮	活動なし	8日	小潮	活動なし
24日	小潮	網の修繕	9日	小潮	活動なし
25日	小潮	1回(⑤)	10日	小潮	活動なし
26日	長潮	2回(⑤、⑤)	11日	長潮	網の修繕
27日	若潮	2回(⑤、⑤)	12日	若潮	網の修繕
28日	中潮	2回(⑤、⑤)	13日	中潮	網の修繕
29日	中潮	1回(⑤)	14日	中潮	1回(①)

※表中の回数は漁を行った回数を示している。また、数字は利用された漁場を示しており、図 1 の漁場番号と対応している。赤字は、前回の漁の後に移動させなかった網から漁獲を得たものである。

この表において、とくに注目したいのが、6 月 25～29 日の部分である。この期間、対象グループは網をほどいて半分ほどの長さにし、村前の水深 2.5m ほどの浅い場所に網を入れ続け、船上から漁獲の確認を行っていた。このように同じ場所に網が入れたままにされていたのは、小潮(maji mafu)から大潮(bamvua)にかけての期間である。ワシニ村の漁撈者の間では、この時期は魚があまり移動せず、潮間帯での置き網漁ではあまり多くの漁獲を期待することができないといわれている。そのため、それまでウカノをウダーのように潮間帯で用いてきた対象グループは、この期間に労力と時間を費やして網を毎日移動させるよりも、網の修繕を行ったり、ウカノの本来の網の使い方であるとされる、ある程度水深のある場所での漁に切り替えた方が効率的であると判断したのである。

なお、7 月 8～13 日にかけても網の修繕などで漁を行わない日が続いたが、この時期も同様に小潮から大潮へと一日の潮位差が大きくなる時期であった。このように対象グループは、潮汐の変化を考慮しながら漁を行うかどうかや、その行い方を検討している。

8．おわりに

置き網漁は、あらかじめ入れておいた網に魚が掛かるのを待つ、という待ち受け型の漁法であるといえる。そのため、漁撈者は漁場の地形や潮汐、魚の生態などを考慮しながら漁を行う時間や場所を決定し、魚がどのように水中を動くのかを予測して漁を行う時間や場所などを決定する必要がある。

村の中において人びとの間に共有されている魚の生態や自然環境に関する民俗知や、他の漁撈者からもたらされる海況や漁獲に関する情報は、網漁についての経験が浅い対象グループの行う活動の進め方に対して手掛かりを与えるものとして、重要なものである。しかしながら、一方で、潮汐に合わせて漁の行い方を変えたり、より多くの漁獲が期待できる網入れ場所を探すというように、漁撈者らは漁を行う中において、効率的にあるいはより多くの漁獲を得ようと試行錯誤を試みる。漁撈者たちは、このように漁を繰り返す中において、魚の動きを読み

取るための手掛かりとなる情報や知識を日々更新し、蓄積していくのである。

謝辞

本稿で示したデータは、総合研究大学院大学文化科学研究科学生派遣事業による助成を受けて行われた現地調査によって得られたものである。

参考文献

Acheson, James M.
1981 Anthropology of Fishing. *Annual Review of Anthropology* 10:275-316.

薪利用を通して植物を知る：ケニア牧畜民マサイ女性の在来生態知の個人差について

田暁潔
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

1. はじめに

1.1 在来生態知の研究課題

東アフリカの牧畜民は、不確実な社会・自然環境のもとで生活を営んできた。そしてそのなかで、彼らは自然環境に関する実践的な知識と技術を磨いてきた。このような知識と技術は研究者と開発機関によって在来生態知と呼ばれ、1980 年代から前景化した気候変動と持続的な発展の問題への対処において重要視されている。

在来生態知は、研究の目的と対象に応じて別様に定義されるのが一般的である。牧畜社会を対象とする本論では、人びとが日常的に家畜と自然環境にかかわる諸実践のなかで蓄積してきた、家畜と自然環境に関する実践知という意味で、この語を用いる。在来生態知は、当該社会の歴史的背景―牧畜社会の場合、近代的開発における周辺化や、牧畜民主導の先住民運動など―と緊密に関連している。また、この概念における「生態」とは、人びとの視点から捉えられた自然環境を指しており、生態学的・生物学的な意味とは必ずしも一致しない。

在来生態知に関する近年の研究では、民族集団を単位として記述・分析するという従来の傾向に対して以下のような意見が提起されている（Reyes-Garcia et al., 2007）。すなわち、ひとつの民族集団のなかでも、性と年齢によって生業への参与のあり方が異なることを考慮し、個人の生活史などに着目して個人を単位として分析することの必要性が強調されたのである。しかし、個々人の知識の習得についての研究では、言語使用と言語コミュニケーションの場面に分析が集中する傾向があり、非言語の学習については十分に検討されていない。個人が自然環境に対していかなる働きかけをおこない、日常生活においてどのように自然資源を利用しているのかなど、非言語的な側面も視野に入れた研究が必要である。

東アフリカ牧畜民の在来生態知に関するこれまでの研究は、家畜をめぐる知識、薬草、土地利用、そして野生動物に関連する知識という四つのテーマに大別される。それらの研究に共通して見られる特徴は、成人を主な調査対象としており、子どもの姿が描かれていることはあっても、単なる知識の受け手としてのみである、という点である。他方で、マサイをはじめとする東アフリカ牧畜社会を対象とした人類学的な研究では、性と年齢に応じた分業を実践するという特徴が指摘されてきた。マサイ社会では男性の場合には、割礼前の牧童と割礼後のモラン、そして既婚男性である長老という三つの年齢階梯がある。女性の場合には、割礼前の少女と割礼・結婚後の既婚女性に大別される。そして、各カテゴリーに応じた生業への参与が求められる (Grandin, 1991)。こうした議論では、子どもたちは大人と協力的しながら、大人とは異なるかたちで生業に参加・貢献する存在として位置づけられる。そのことは、マサイの子どもが大人と異なるアプローチで自然環境とかかわりながら、知識と技術を身につけていることを示唆しているが、その詳細につい

て具体的に検討されているわけではない。

1.2 研究目的

マサイの人びとは、日常の様々な場面で植物を利用している。たとえば、家畜と人の病気治療や食用、家作り、杖や鞭などの道具作り、そして儀礼などの機会に、多様な樹種が選択的に使われている。彼らが有する植物に関する知識については、これまでおもに医療や家畜の採食といった用途との関連、あるいは植生の季節的な変化との関連で報告されてきた（e.g. Maundu et al., 2001）。それらの研究の多くは成人男性をインフォーマントとしており、成人男性とは異なるかたちで生業活動に参与している女性たちを対象とした研究は限られている。

また、定住化が加速しはじめた 1990 年代から、マサイの人々は農産物に依存する食生活を送るようになっており、その調理のために使われる薪は、唯一の燃料として重要な位置を占めている。女性にとって薪の採集は、もっとも頻繁に植物と接触する日常的な活動のひとつであり、その活動をおこなうことは、少女と女性が日常的に植物を知る重要なプロセスである。以上の研究背景を踏まえた上で、本論では、マサイの少女たちの薪利用を例として、彼女たちが個人としてどのように在来生態知を蓄積しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 調査地と方法

調査地の村は、ケニア南部のカジアド・カウンティに位置するロイトキトク地域集団の東端にあり、二つの国立公園と隣接している。現地のマサイは家畜の放牧だけでなく、観光や農業、出稼ぎなどによって現金収入を得ている。また、近年では学校教育が重要視されており、現地のチーフによると、村にある唯一の小学校における学齢児童の就学率は 80%以上になっている。

筆者は 2015 年に、少女たちの薪採集と薪利用の日常活動について参与観察と聞き取り調査をおこなった。対象は、ひとつのホームステッドに暮らしている 7 人の 6〜15 才の少女と、彼女たちと頻繁に一緒に薪採集へ出かける、近隣のホームステッドに住む 5 人の少女（9〜14 才）であった（表 1）。

表 1　調査対象とした少女たちの基本情報

番号	年齢	ホームステッド	観察回数
Nk	15	K	16
Tn	13	K	19
Lst	9	K	6
Ln	13	K	19
Sk	12	K	26
Tt	6	K	2
Ml	11	K	18
Mg	14	近隣 1	6
Chl	13	近隣 2	6
Rl	15	近隣 2	8
N	11	近隣 3	2
B	9	近隣 3	4

3. 調査結果

3.1 幼い時期からの薪採集

少女たちは、幼い時期から薪集めに従事する。1 歳から 5 歳までの少女たちは、半分は遊びで、ホームステッドの周囲約 500 ㎡の範囲で薪を集める。6 才になると、少女たちはホームステッドから約 3〜5km 離れた、住む人のいない場所で薪を集めていた。日帰りでおこなう一回の薪集めには、移動に約 1 時間と、薪集めに約 2 時間半かかっていた。調査対象とした 12 人の少女たちは、毎回 2〜9 人の集団となって薪集めへ

と出かけていた。ほとんどの場合に参加するのは少女たちだけであり、成年女性が参与したのは 2 回のみであった。少女たちが成年女性とともに日帰りの薪集めに行く機会は、極めて少ないのが現状である。

3.2 採集した薪の量と質

55 日間の参与観察期間中、少女たちが薪集めに出かけたのは一人あたり 2〜26 日であり、毎回 5〜29kg を集めていた。その量は、たとえば Ln と Sk、そして Tt がいる世帯にとって、約 80 日分の消費量に相当する。また、少女たちはこの 55 日のあいだに集めた薪には、24 種の植物が含まれていた。

薪として利用した植物についての聞き取り調査からは、少女たちが薪利用の観点から樹木を評価する際に、採集地までの距離、重さ、風化の程度、燃焼時間、煙の量、匂い、炭の量などの点を勘案していることが明らかになった。また、それらの評価には、状況によって違いが見られた。たとえば、「チャイ作りによいがご飯作りによくない」「良い香りだが採集できる場所が遠すぎる」などのように、調理の場面や樹種の特徴、空間、また複雑な自然環境にある樹の状態との関連において、薪として利用する樹種が評価されている。また、成人女性たちは、「切る時には割れやすい」「木はにがい匂いがする」「煙が目しみて痛い」「燃やす時にパッパッパという音をたてる」など、五感を使った表現を多用していた。

3.3 五感と感情を生かして植物を知る

薪採集の際に少女たちは、成年女性と同じく、蛮刀や拾ってきた長い棒を使っていた。それぞれの道具を薪集めにうまく活用するためには、五つの身体の動きが求められるとされる（表 2）。

表 2　薪採集の際に表現される身体の動き

マー語	道具	身体の動き
Asul	蛮刀, 拾った棒	集めた枝から細枝と棘を軽く削りとる
adany	斧（大人だけ） 蛮刀	太めの薪を割る
Adung	蛮刀	切る（切り倒す）
Aiper	蛮刀	枝を真ん中から均等に二つに割る
Agel	手	枝をある程度切ったあとに、手で折る

以下では三つの事例を取り上げながら、薪採集の過程において少女たちがどのように上述の五つの身体的な動きをしていたのか、また、樹種を選択する際に個々人の好みがどのように関与していたのかをみる。

事例 1　Lst（9 歳）

Lst は合計 6 日の薪集めに参加し、そのうちの 5 日で合計 38.5kg を集めた。積極的に蛮刀を使用した彼女は、頻繁に丸切り（*adung*）の動きで枝を切ろうとしたが、集めた薪のほとんどは、直接に手で折った（*agel*）ものだった。彼女は植物種に関わりなく、地面に落ちっている木を採集した。それらの木はある程度風化が進み、彼女にとって集めやすいと考えられる。集める際には、地面から拾ったものであっても、入念に乾燥度を確認していた。

事例 2　Mg（13 歳）

Mg は一日の薪集めに行き、一本の *Ormocarpum kirkii* の木から 28.5 kg を集めた。彼女は自分のために 22.5 kg を確保する

と、残りの 6 kg は同行してきた少女たちに分けた。*Ormocarpum kirkii* の木は、側枝どうしが密接に絡み合っており、Mg によると、この木を切るためには一工夫こらす必要があった。

彼女はまず、主枝を主幹から丸切り（*adung*）にした。切った主枝を地面に置いて、運べるような大きさに真ん中で均等に割った。また、高い位置に伸びていた側枝については、低位置で主枝と連接する部位を少し切ったあとで、直接手で折った（*agel*）。そして最後に、薪にならない小枝と棘を軽く削りおとした（*asul*）。彼女はその樹種が大好きだと言い、完全に乾燥した樹木を見つけたたら、必ず一本は採集する、と語っていた。

事例 3　Sk（12 歳）と Nk（15 歳）

Sk は採集の際に、*Rhus natalensis* の木を探していた。彼女は、この木の材はピンク色で、割ると良い香りがするので好きだという。彼女とは異なり、15 歳の Nk は、虫に食われず、燃焼時間が長く、燃えるときの煙の香りが良い木を好んでいた。実際に、彼女はしばしばホームステッドから 5km も離れた溶岩地域まで行って、薪を集めていた。少女たちは、それぞれ独自の好みに応じて樹種を選択する一方で、同行者の好みについてもよく知っている。同行者のお気に入りの樹種を見かけた際には、その場所と乾燥度などに関する情報をその人に伝える姿が、しばしば見られた。

4. まとめと考察

本研究は、マサイの少女たちの薪利用を事例として、個々人がどのように在来生態知を蓄積しているのかを実践の側面から考察した。マサイ社会において女性は、薪採集などの日常的な生業活動を通して、男性と異なるアプローチで自然と直接にかかわっている。少女たちは牧畜社会に特有の性と年齢による分業に能動的に参与し、学校教育や季節変化などの外的要因に配慮しながら、生業に貢献し続けている。

薪採集に参加する少女たちは、五感を使って植物と接触し、自然環境にある様々な状態の樹木を、身体を通して認識しながら薪を採集していた。このプロセスにおいては、複雑な自然環境や個々人の身体的な特徴（たとえば身長や体力など）または感覚に起因する、個人間の差異が見られる。少女たちはまた、植物に関して同行者がもっている独自の知識や利用方法を、観察や会話を通して共有している。実践の側面からみるマサイの在来生態知の個人差は、自然環境の複雑さや、五感を使った個々人の自然環境とのかかわり、そして社会参加の過程で培われてきた独自の関心や興味と関連している。

参考文献

Reyes-Garcia, V., N. Marti, T. Mceade, S. Tanner & V. Vadez, 2007. Concepts and methods in studies measuring individual ethnobotanical knowledge. *Journal of Ethnobiology* 27(2): 182-203.

Maundu, P., D. Berger, C. Ole Saitabau, J. Nasieku, M. Kipelian, S. Mathenge, Y. Morimoto & R. Höft, 2001. *Ethnobotany of the Loita Maasai*. People and Plants Working Paper 8. Unesco, Paris.

Grandin, B. E. 1991. Chapter 3: The Maasai:

Socio-historical context and group ranches. In (S. Bekure, P. N. Leeuw, B. E. Grandin & P. J .H. Neate, eds.) *Maasai Herding - An Analysis of the Livestock Production System of Maasai Pastoralists in Eastern Kajiado District, Kenya.* International Livestock Center for Africa, Addis Ababa.

カメルーン東部州狩猟採集民バカの女性による植物性食物の分配と社会関係

関野文子
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

1. はじめに

狩猟採集民による相互の食物分配は狩猟採集社会を成り立たせる基盤的特徴である。カメルーン東部州に暮らす狩猟採集民バカは単独あるいはグループで採集、狩猟活動を行い、調達した食物を相互に分配しながら生活をしている。食物分配についての先行研究では、とりわけ男性ハンターが得た獣肉の分配に議論が集中してきた。肉の分配は分配のプロセスが明確であり、役割や親族関係によって段階的に分配が行われることが特徴として挙げられる（Bahuchet 1990）。獣肉のように大量の食物が分けられ、集団内に行きわたっていく様子は狩猟採集民の文化的慣習の中でも特に目立つものとして着目されてきた。持つ者から持たない者へ肉が分配されることによって、成員間での平等性を担保する役割があると同時に、道具や技術によって狩猟の成果に影響がでるため、生じた不均衡を分配によって是正する働きがあると考えられてきた（Woodburn 1982）。しかし、実際の狩猟採集民の食生活の大部分は、キャッサバやプランテンバナナ、野生の葉やキノコを使った料理など、肉ではなく女性によって得られた植物性食物で成り立っている。植物性食物の分配は、分配の規則や分ける量の判断などの点で獣肉とは異なった性質がある。そこで、本報告では、女性による植物性の食物の分配の実態を記述するとともに、女性同士の社会関係に与える影響について検討する。

2. 調査地と調査方法

調査地は、カメルーン共和国東部州オ・ニョン県メソック郡Ｌ村である。2014 年９月に初めて調査地を訪れ、２ヵ月半の予備調査の後、翌年の 2015 年８月に二度目の調査を２カ月半行い、計５カ月間のフィールドワークを実施した。幹線道路沿いに位置するＬ村は全長約 150m で、メソックの町までは、約３km である。人口は 2015 年８月時点で 148 人、出稼ぎなどのため不在にしている者を合わせると 168 人になる。バンツー系農耕民であるンジメの男性１人を除いて全員が狩猟採集民バカである。農耕民ンジメとバカは日常的に雇用関係や物の取引などをしている。バカは個々人が氏族に属しているが、L 村はその中でもンジェンベ（Njembe） に属する人を中心に成り立つ村である。したがって、一代前の村長を中心に全ての住人がなんらかの親族関係でつながっている。調査方法は、参与観察および聞き取りである。全ての世帯を対象とし、同じ炊事場で作られた食事を食べるメンバーを一つの世帯単位として調査を行った。したがって、分配は炊事場を異にする女性間、あるいは世帯間での料理のやり取りであると定義した上で分析した。

3. 結果

3-1 分配される食物の種類と特徴

分配される食物のカテゴリー別の内訳は、キャッサバやプランテンバナナ、ヤウテアなどの主食食物が 59%、キャッサバの葉な

ど副食食物が 29%、肉が８%、魚、食用虫、その他料理が合わせて４%を占めていた。頻繁に分配される食物は、茹でキャッサバ、キャッサバの葉の煮物、プランテンバナナ、グネツムの煮物の順に頻度が高い。これは、それぞれの料理を作る頻度と一致しており、頻繁に作られる料理ほど必然的に分配の回数と頻度も多くなっている。

次に料理でも作られたにもかかわらず、分配されなかったものに着目する。分けられなかったとは、作ったものの自分の夫や子ども以外には全くあげなかったことを意味する。全体の平均では、二割程度の料理は、同居の者以外には分けられずに世帯内で消費されているが、ほとんどの料理は誰かしらに分配されている。もっとも頻繁に食べられる二大主食のキャッサバが分配されなかった割合は 15%、プランテンは、26%でキャッサバの方がより分配される傾向にある。村で消費されるキャッサバの大部分は、農耕民ンジメの畑で除草などの労働の対価として収穫が許可されて取ってきたものである。農耕民ンジメのキャッサバ畑は栽培規模が大きいため、一度に収穫できる量も多い。したがって、調理できる量も多いため、分配の数も多くなっている。

一方、全体に占める割合が少ない肉の分配に着目すると、肉の方が主食よりも、分けられる確率が高いことが分かった。特に罠猟で得た自給の肉の場合である場合、全て分けられていた。つまり肉の場合は、現金で購入したために量が非常に少ない場合を除き、作ったならば必ず分配されている。L 村では、親族関係などに基づく調理前の肉の分配（二次分配）がほとんど行われないため、料理となって初めて分配される。したがって、肉料理は、十分な量がある上で分配されている。一方、植物性の食物は、肉に比べると分けられない確率が高くなっている。キャッサバのように、農耕民の畑でしか十分な量を得られないようなものであっても、労働の対価に得た食べ物であることを理由に分けられにくいことはなく、むしろ自分の畑で得られるプランテンの方があげない確率は高くなっている。

3-2 集団でみる食物分配

定住村のように多くの人が集まっている場所では、全員に料理を配ることは不可能である。そのため、食物分配は、おおよその分配範囲の中で行われ、集団を越えた分配は通常あまりみられない。ここでは、分配傾向を元に二つのグループを設定し、そのグループ内での分配を分析した。10 日間のうちに９人の女性からなるグループの分配に着目する。期間中に同時でなくとも一度でも２人の女性間で互いにあげる、もらうことがあれば、相互的な分配があるとみなし、一方の女性のみがもらう、あるいはあげていた場合には、一方的な分配とした。

グループ A では、女性一人に対する分配相手の数が多く、分配の密度が高い（図１）。10 日間で相互の分配が見られたのは、全分配のうち 64%である。このうち女性④は、村長の妻であり、グループ内全ての人から料理をもらっている。相互の分配では同時に同じような食事を分け合っていることもあるため、分配の動機は、相手が食物を持っているか、料理をしているか否かだけではない。

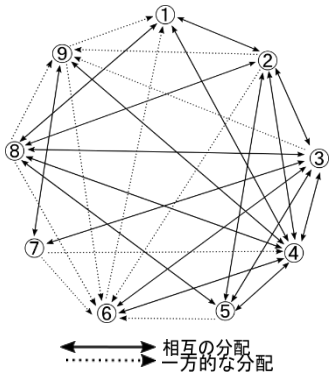


図１　集団Ａにおける女性の食物分配のソシオグラム

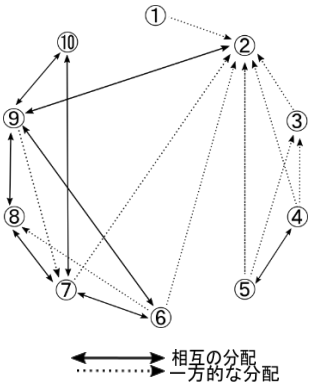


図２　集団Ｂにおける女性の食物分配のソシオグラム

一方、グループＢはグループ内の分配密度が低く、固定的な分配相手の人数が少ない。相互の分配割合は41％で、グループＡに比べると一方向的な分配が多い（図２）。つまり分配メンバーが比較的少なく限定的であり、人からもらうばかりの状態が多い。中でも、最高齢の②は特に多くの女性から分配を受けている。このように一定期間でも相互の分配がない場合があり、一方的な分配でも不和が生じず分配が成立している。働くことが困難である場合や、世帯に働き手が少ない場合に対してはより多く分配される傾向にある。

グループＡとＢの分配範囲が異なるように分配の大小や傾向は個人やグループによって大きく変化する。要因としては、近くに暮らす血縁が多いほど分配メンバーの人数が多いと考えられる。また、労働力があまりない高齢者は、一方的に分配を受けることが多い。このように一部では、分配は個人の食物不足の回避として機能しているが、他方では同じ食物を交換していることもあり、同じ分配でも状況が異なることが分かる。

3-3 現金経済と食物分配

バカの食事でスパゲッティーなどの工業製品が食べられることはごく稀にあるが、例え現金で買ったものでも、ある程度分けられる量があれば、通常のように分けられる。しかし、現金で購入した獣肉やスパゲッティーなどは、単純に量が少ないため、大勢に分配することが難しいため分配量は少なくなる。また、現金経済が浸透した現在でも、バカが他のバカから現金で食物を購入することはみられない（Kitanishi 2000）。

現在のバカ社会では、一次的に現金を持つ者と持たない者の差は存在するものの、それが食生活に大きな格差を生み出すといった状況はみられない。通常、現金が分けられることはなく、お金に関しては非常に個人主義的な所有の意識を持っていると考える。しかし、現金が一旦、食物に変わった時には、お金に対する個人所有の意識が薄くなると示唆できる。つまり、食物分配は、現金としては分けられない価値を別の形へと

還元させて、資源を分配する機能も持ち合わせている。

4. まとめと考察

バカ社会における食物分配の大部分を構成する植物性食物の分配は、獣肉の分配とは異なり、明確なルールがなく流動的なもので、個人やグループにより分配範囲や傾向の差がみられる。女性による食物分配の多くは植物性食物であり、分配数は料理の量によって決まる傾向にあり、入手方法や労働力の大小は直接の関係はない。植物性食物の分配は、相手も同じように料理を作っており、必ずしも分ける必要性がないように考えられる場合でも分けられている場合と、食べ物がない状態で一方的にもらうだけの場合もある。つまり、あげる側ともらう側の両者が同じような立場である分配と両者に差がある状態での分配がある。特に、女性同士が同じ食べ物をやり取りすることは、植物性食物の分配に特徴的なことで、供給が安定的ではない肉の分配にはない特徴である。

植物性食物の分配は、ゆるやかな範囲があるものの、その時の料理の量や相手の状況によって様々に変わっていく。固定的な関係を軸にした行為ではないため、分配が行われなかった時や不均衡が一時的に生じたとしても、それが表立って女性同士の不和に繋がる可能性は低い。したがって、食物分配は社会関係に優劣を生じさせることなく、既存の社会関係の中で自身の状況や相手の状況、親族関係などを互いに確認し合いながら、様々に変化をして継続、維持されている行為であるといえる。

参考文献

Bahuchet, S. 1990. Food Sharing among the Pygmies of Central Africa. *African Studies Monographs* 11(1)：27-53.

Kitanishi, K. 2000. The Aka and Baka: Food sharing among two central Africa hunter-gatherer. *Senri Ethnological Studies* 53: 149-169.

Woodburn, J. 1982. Egalitarian societies. *Man* 17-3: 431-451.

アンデス牧畜民村落における住居の分布と季節移動

佃麻美
京都大学大学院人間・環境学研究科

1. はじめに

本稿の目的は、「定住的」であるといわれるアンデス牧畜において、人々と家畜がどのように季節移動しているかを、具体的な事例から明らかにすることである。

アンデス高地では、南米に特有の家畜であるラクダ科のリャマとアルパカが主に飼養されており、その牧畜の特徴の 1 つは定住的である（定牧）ということである（稲村 1995；2014）。すなわち、荷駄獣であるリャマが輸送や交易のために長距離移動するほかは、家畜、特にアルパカが長距離または規則的な上下移動をすることはない。牧畜民は比較的狭い領域内に 2 つ以上の住居をもち、季節移動はそのあいだに限定され、標高差はほとんど問題にならない。乾季には草地のローテーションのため約 1 ヵ月ごとに住居間を移動し、家畜の出産期にあたる雨季には水はけがよく多くの家畜囲いがある住居に移動するという。このように、定住的とは家畜飼養が高原という特定の生態系の一定の領域内で完結することを意味しており、まったく移動しないということではない。稲村が提示する事例は一例のみであり、より多くの事例を検討する必要があると考える。本稿では、筆者が調査している牧畜民村落における住居の分布と季節移動のバリエーションについて報告する。

2. 調査方法

現地調査はペルー共和国クスコ県南部の P 村（*Comunidad Campesina de P*）で行った。P 村の平均標高は 4950m で、人口およそ 1060 人（110 家族）、アルパカ・リャマ飼養者が 95%を占める。クスコ県都のクスコ市と、プーノ県都のプーノ市の間を走る幹線道路の間に位置する町 S（標高約 3500m）から、毎日 1 便、P 村の中心村落（標高約 4700m）までトラックが出ている。町 S から P 村の中心村落までの道は未舗装で、片道 4〜5 時間程かかる。中心村落には学校、集会所、売店と食堂が数軒、小さな病院がある。最近になって中心村落には電気と水道が整備された。P 村は 8 つのセクターに分かれている。住民の多くは中心村落に住居をもつが、そこに常時住む人は少なく、広く散在した各世帯の放牧地で家畜は飼養されている。

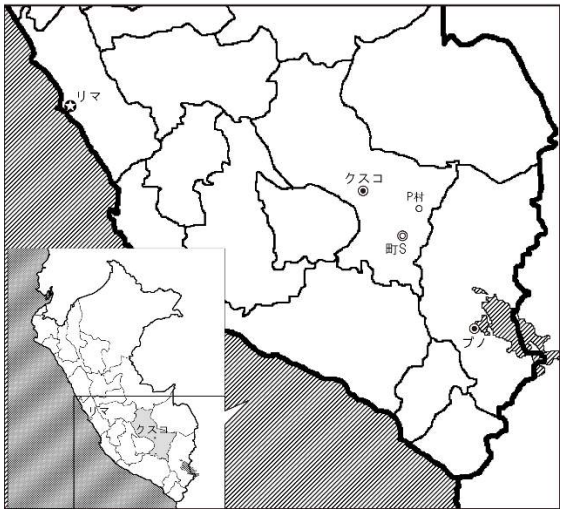


図 1　P 村の位置

P 村の位置する中央アンデス高地の西斜面は乾燥しており、またその領域はプナと呼ばれる寒冷な草地帯（標高 4000〜4800m）が占めている。低緯度高地であるため、日中は比較的気温が上がり、夜間には気温が下

がるというふうに一日の気温差は大きいが、年間を通しての気温差は小さいという特徴がある。季節は 11～4 月の雨季と 5～10 月の乾季に分かれ、アルパカ・リャマの出産、交尾、毛刈りなどの活動は雨季に集中する。

調査は 2013 年 12 月 7 日～2014 年 3 月 25 日、2014 年 7 月 17 日～2015 年 3 月 12 日に行った。各世帯を訪問し、家族構成、家畜頭数、住居数などの聞き取り調査をしたほか、GPS 付きカメラによって各住居の位置情報を取得し、また複数の世帯に住み込んで、放牧や家畜の移動に同行した。

3. 住居の分布と季節移動

3.1. 各世帯の住居数と家畜頭数

アンデス牧畜では牧畜民はそれぞれ一定の放牧領域を占有し、その領域内に複数の住居があり、そのあいだで季節的な移動を行っているという（稲村 2014：266)。P 村で 75 世帯から聞き取り調査を行ったところ、住居数にはばらつきがあり、また住居を 1 つしかもたないという世帯もあった。住居数の平均 2.2 であった。飼養家畜はアルパカが平均 191.7 頭、リャマが 15.5 頭、ヒツジが 48.9 頭、ウマが 1.3 頭、ウシが 0.5 頭である。アルパカがどの世帯も飼養数が最も多く、P 村における主要な家畜はアルパカであることがわかる。一方、荷駄獣であるリャマは、道路などのインフラ整備が進むなかで重要度を下げており、飼養頭数は減少する傾向にあり、飼養しない世帯も増えている。ヒツジは主に肉用として飼養されており、ほとんどの世帯が所有している。ウマは荷駄用・騎乗用として、特に中心村落から離れた場所に放牧地をもつ世帯では 1～2 頭飼養していることが多い。ウシは標高が高いため飼養に適しておらず、所有している世帯は少ない。住居数ごとにみてみると、住居を 1 つもっていると答えた世帯は 28 で最も多い。2 つもっていると答えた世帯は 27 で、住居数が 2 以下の世帯が全体の 73%を占める。住居を多くもつ世帯ほど飼養家畜頭数も多くなる傾向がある。

住居数	世帯	アルパカ	リャマ	ヒツジ	ウマ	ウシ	合計
1	28	121.9	7.5	31.4	1.2	0.5	158.0
2	27	179.9	14.6	51.6	1.1	0.3	247.6
3	11	238.5	16.3	68.9	1.2	1.5	326.5
4	5	225.0	15.6	94.0	2.4	0.0	337.0
5>	4	572.8	75	42.0	2.0	0.3	692.0

表 1　住居数と家畜頭数

3.2. 住居の分布

住居の分布について、セクターPh をみる。セクターPh は中心村落から南東に 8.5km、8 世帯の放牧地がある。住居数 1 の世帯は 1、住居数 2 の世帯は 5、住居数 3 の世帯は 1、住居数 4 の世帯は 1（ただしそのうち 1 つは現在使用していない）である。各世帯の住居間の距離は 3km 以内、標高差は最大 150m であった。

3.3. 季節移動

複数の住居をもつ世帯がどのように季節移動をしているかについて、世帯 RC の事例をみる。世帯 RC は住居を 4 つもち、飼養家畜はアルパカ 300 頭、リャマ 30 頭、ヒツジ 70 頭、ウマ 1 頭である。最も標高の低い住居が 4710m、最も標高の高い住居が 4840m で、住居間の距離は最大 2.1 ㎞、最小 0.5 ㎞である。

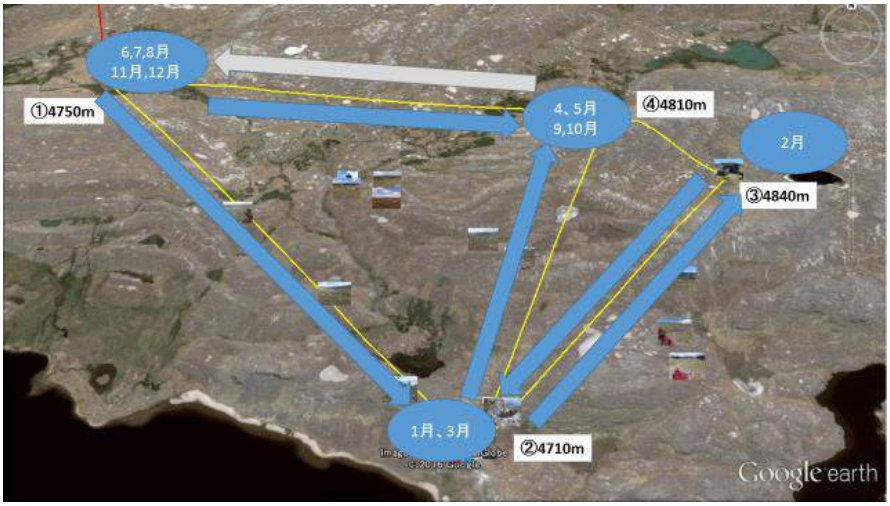


図 2　RC 世帯の季節移動

世帯 RC の移動を図 2 に示す。4～12 月は住居①と④のあいだ、1～3 月は住居②と④のあいだを移動していることから、住居①と④が乾季の住居であり、②と③が雨季の住居であることがわかる。乾季のあいだの住居は川の流れのそばの、比較的水の多い場所に位置している。また、各季節のあいだにも草地のローテーションのため、1～3 ヶ月ごとに移動していることがわかった。

4. 季節移動のバリエーション

4.1. 住居を 1 つしかもたない世帯

住居を複数もつ世帯は乾季と雨季で住居を変えているが、住居を 1 つしかもたない世帯も全体の 37%を占めている。かれらはどのように季節移動をしているのだろうか。

一部の世帯は、同じ放牧地のなかでも利用する部分を季節により変えることで草地のローテーションをしている。そのほかに親族を頼り、共同で放牧地を利用する世帯がある。

事例 1. 親族と共同で放牧地を利用

世帯 VV はアルパカ 100 頭、リャマ 14 頭、ヒツジ 20 頭、ウマ 1 頭、ウシ 2 頭を飼養し、世帯 DM はアルパカ 200 頭、ヒツジ 200 頭を飼養する。両世帯はセクターKa に隣接してそれぞれ雨季の住居をもつ。世帯 VV はほかに住居をもたないが、乾季には世帯 DM がセクターUn にもつ住居に家畜を移動させ、両世帯の家畜を一緒にして交代で放牧をする。セクターKa とセクターUn の住居間距離は 2.1km である。

また、放牧地を借りる世帯もある。

事例 2. 放牧地を借りる

世帯 SM はアルパカ 80 頭、リャマ 10 頭、ヒツジ 1 頭、ウマ 1 頭、ウシ 1 頭を飼養し、セクターKa に住居を 1 つもつ。2015 年 1 月 7 日（雨季）、世帯 SM は隣村の人から放牧地を借りて家畜を移動させた。午前 7 時 50 分、家畜をすべて追いながら徒歩で移動を開始し、午後 3 時に移動先に到着した。出発地点は標高 4650m、到着地点は 4630m、途中で 4700m の最高点を通過し、距離は 8.5km であった。

4.2. 多数の住居と家畜の分散

多数の住居をもつ世帯では、家畜を分散させて放牧している場合もある。

セクターYa の放牧地は親族関係にある世帯 SA と世帯 EF の 2 世帯が所有しており、住居はあわせて 10 ある。2015 年 3 月には 6 つの住居が使用されていた。両世帯あわせてアルパカ 1118 頭、リャマ 70 頭、ヒツジ 80 頭、ウマ 6 頭、ウシ 1 頭を所有している。これらを 6 群に分け、うち 4 群は牧夫を雇って放牧を任せている。雇われ牧夫は両世帯の家畜だけでなく、自身の家畜（数十頭程度）もあわせて放牧している。このように複数の群れに分ける理由の 1 つは、現在 P 村で推進されているアルパカの品質改良のためであると考えられる。住居④で放牧しているアルパカは、改良用として選別されたメスと種オスであり、牧夫に任せることなく、世帯 SA が自ら世話している。

住居番号	標高(m)	住人	アルパカ
①	4885	世帯 EF	250
②	4880	牧夫 a	300 (一歳仔)
③	4880	牧夫 b	200
④	4905	世帯 SA	150(♀) 18(♂)
⑤	4990	牧夫 c	200 (非妊娠♀)
⑥	4915	牧夫 d	?

表 2　セクターY におけるアルパカの配置

住居を 5 つ以上もつ世帯はいずれも牧夫を雇っている。雇用主世帯が住む住居はソーラーパネルや水道などの設備が充実しているものにほぼ固定されている。一方、雇われ牧夫は比較的頻繁かつ遠距離に移動する。1 年未満で雇用主を変えることもあり、また村内の人だけではなく他村の人が雇われる場合もある。所有家畜は少ないことが多く、まったく所有していない場合さえある。

5. おわりに

以上、定牧といわれるアンデス牧畜の季節移動についてみてきた。セクター内での移動距離は短く、標高差も大きくない。乾季の放牧地としては何よりも水を確保できることが重視されている。住居が 1 つしかない場合には、親族での放牧地の共同利用やで借用、他セクターや他村への移動などさまざまなパターンがあることがわかった。そのなかでも雇われ牧夫は相対的に移動距離が長い傾向がある。すなわち、セクター内や村内に十分な放牧地を確保でき、かつ自身の家畜だけで生計をたてられる世帯は移動距離が短いが、一方、放牧地が不足している、あるいは自身の家畜だけで生計をたてることが難しい世帯は移動距離が長くなる傾向があるといえる。

季節移動には近年の土地制度の変化やアルパカの品質改良も影響を与えていると考えられる。今後、これらの影響も含めて検討していきたい。

参考文献

稲村哲也 1995『リャマとアルパカ―アンデスの先住民社会と牧畜文化』花伝社。

稲村哲也 2014『遊牧・移牧・定牧―モンゴル・チベット・ヒマラヤ・アンデスのフィールドから』ナカニシヤ出版。

視覚メディアを用いた人類学的方法論についての考察
―写真を用いたエスノグラフィーの作成

岩谷洋史
国立民族学博物館

１．はじめに

調査者がフィールドワークをする際に、デジタル技術を応用した記録機器であるデジタルスチルカメラ、いわゆるデジタルカメラを携帯することは一般的になっている。技術的な進展により、機器の価格が低下するとともに、小型化し、使い勝手も良くなり、決して専門家でなくても、誰でも気軽にそれを使って、フィールドの記録をすることができるようになった。今や、フィールドワークを遂行するにあたり、重要な道具となっている。それを駆使できるかどうかによってデータの収集だけでなく、データを分析する際の方向も変わってくるだろう。

当然のことながら、機器の利用が容易になったからといって、従来よりも研究成果が向上するという保証はどこにもなく、活用に対して過剰な期待は慎まなくてはならない。だが、こうした機器の活用によって、別種の知識表現のあり方を作り出すことが可能かどうかということについて検討してみることは必要だろう。

そこで、検討したい一つの課題は、デジタルカメラを用いて収集した写真を用いたエスノグラフィーの別の形、いわば、フォト・エスノグラフィーとでも呼び得るものが可能であるかどうかということと、そして、可能であるならば、それはどういう形態であるのかということである。

２．エスノグラフィーとはなにか

まず、エスノグラフィーがどういうものか確認しておこう。

人類学におけるエスノグラフィーの現状は多様性を呈しているものの、エスノグラフィーという言葉の最大公約数としての意義は、エスノグラフィーのハンドブックのなかで述べられているように「参与観察を基本とした特定の社会的・文化的な場の直接的な経験や探究に根ざしている」［Atkinson et al. 2001:2］となる。ここには、比較的長期に渡り、日常生活のなかに入り込み、人びとと親密な関わりを通じることによって、人びとの様々な信念、行為などなどを他のどのような方法よりもよりよく理解できるといった一つの仮説があると言える。

本発表との関係で指摘しておきたいことは、ヴァン＝マーネンによるならば、エスノグラフィーには二重の意味があるということである。一つはプロセスとしての研究方法で、もう一つはプロダクトとしての研究成果物である。研究方法として用いられる際は、エスノグラフィーは参与観察という意味でのフィールドワークを指す。それは通常、長期に渡って研究対象の人びととともに生活していくという態度がとられる。一方、研究成果物であるならば、文字媒体でテキスト化された表象物を意味する。

小田博志によると日本においては、プロセスとして理解する傾向がある英語圏とは異なり、エスノグラフィーとは、フィールドワークの成果をまとめた報告書や論文と理解される傾向があったという。小田は、このことを踏まえ、エスノグラフィーは、「社会的場（フィールド）における事象を、そこに

固有の関係性の中で理解し、その理解を踏まえながら理論化を展開していく質的方法論の一つ」［小田　2009：14］であることを強調し、「具体的な描写と抽象的な理論的考察とが一体となったアプローチ」と捉えている。

３．写真の活用方法

人類学的なフィールドワークにおいて、写真を活用するという歴史は古い。たとえば、近代人類学の基礎を確立したブロニスラフ・マリノフスキーの時代には、すでに写真は重要な調査ツールとなっていた。1980年代頃から写真資料自体を研究対象に据える動きが、文化人類学、および関連諸分野では活発となってきている。文字資料には残されていない文化的な背景や画像自体がもつ表象の特質を分析、および検証する対象として注目されているからである。

アルベール・ピエットは、知識様式（mode de connaissance）としての写真の原理として、「指標」（index）、「同型」（isomorphisme）、「距離」（distance）、「切断」（coupure）、「単調」（platitude、「特異性」（singularité）、「行為」（act）といった７つの原理をあげているが[Piette 1993]、このなかで最も基本的な原理は、「指標」であろう。写真は、基本的に指標的性質をもった像であり、その指示対象と物理的、かつ直接的な結びつきを有する記号である、あるいは、そうであると見なされている。それは静止した像として現れるものの、過去の記憶の補助になるとともに新たな記憶を形成させる記録ともなりうる。

しかしながら、現在、デジタル技術を応用して作られるデジタルカメラが主流になった現在、「指標」が果たして保証されるのかどうかという議論もさながら、フィールドワークにおいて注目したいことは、そのデジタル機器は、利便性が高いために、誰もが気軽に、容易に画像を生成させることができるようになったという事実である。

たとえば、デジタルカメラの利用方法は、銀塩写真のスチルカメラのものとは、異なった経験を撮影者にもたらした。それは、あたかもノートをとるかのように、写真を撮ることを可能にした。このことは、大量の静止画像データを取得することができるということ以上に、カメラのシャッターを押すということよりも、写真を選択し、どのように管理（あるいは編集）していくのかということに、写真撮影の重心が移っていったと言える。

そこで、エスノグラフィーの中でその中心的な役割を担うのは、現在においてもフィールドノートや印刷物などの文字媒体であるが、デジタルカメラによって、フィールドノートをとるように写真撮影ができるようになった現在、その視覚的なメディアを文字と同等のものとして活用する方向も検討する必要があると考える。

４．フォト・エスノグラフィーの一つのあり方

それでは、フォト・エスノグラフィーと言った場合、どのようなものが考えられるのであろうか。それは、大雑把に言えば、写真という視覚的メディアをもっぱら活用したエスノグラフィーと定義されうるものである。

少なくとも、それは、写真一点を提示し、テキストを付けて解説するといったような

ものでも、複数の写真を陳列させるギャラリーのようなものでもない。フォト・エスノグラフィーとは、調査者がフィールドの人びととの関係において成り立つ参与観察を土台とする、エスノグラフィックな研究手法を用いて、調査者が複数の写真を収集し、様々な文脈を考慮しつつ、何らかの理論を介在させることによって論理的に秩序を与えるプロセス、および、そのプロセスを経た後の複数の写真の集合体である。そして、その集合体によって全体として意味をもち、それがまた一つの像をなすものである。

調査者は、フィールドで大量の静止画像を取得し、大学や自宅に戻ってデータ整理をするが、もしも撮影した写真がぶれていたり、しっかり捉えられてなかったりした場合、可能であれば、もう一度フィールドへ赴く。また、写真を整理する過程で、最初に想定したテーマとは異なる発見がある場合、その発見に基づいて、またフィールドへ赴くこともある。こうした作業と並行しながら、大量の写真のなかから、フォト・エスノグラフィーに使う写真を取捨選択する。複数の写真を分類したり、比較したり、時間的空間的に秩序付けたりしていく。そして、フォト・エスノグラフィーの実践の成果物をある一定の筋道に沿ったものとして固定化させられたものである。

発表者は、一つの試みとして、PowerPoint、Keynote といった、順番に線的にスライドを表示していくプレゼンテーション用アプリケーションを用いて作成を行った。その具体的な作業は、次のようなものである。一枚の写真を加工・編集し、その編集したものを一つ、あるいは複数枚一つのスライドに乗せていく。そして、一つのスライドは、別のスライドとの関係でスライドを表示する順番を決めていくといった作業である（図 1）。なお、文字をすべて排除するのではなく、タイトルやキャプションなど、最小限の文字での説明を入れ込んで構成した。

5. フォト・エスノグラフィーの課題

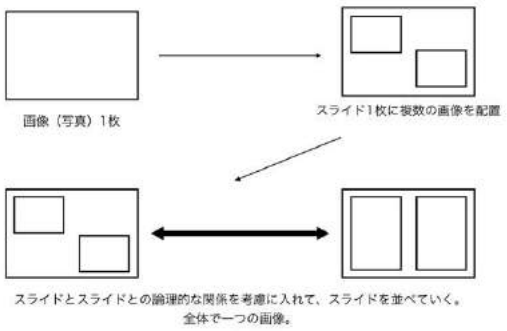


図 1　フォト・エスノグラフィーの作成

写真は、何らかのメディア（紙やコンピュータの各種記録メディアなど）に撮影者が現在、経験している出来事や事柄を安定化、固定化させたものである。撮影者が経験した現実の情報量を選択的に減らしているという意味で単純化、あるいは抽象化させたものであり、情報内容を型にはめる操作を行っているという意味で形式化させたものであると言えよう。それは、撮影者によって経験された現実をありのままに映し出しているのでは決してない。撮影すること自体が現実のある一面を再構成することであると言ってよい。

そして、その再構成したものを複数集めて、集めて、前述したように、フィールドワークにおいて大量に撮影した写真を、組み合わせ、並べ、ある一定の論理にしたがって、秩序を与えていく。

撮影者が経験した時間的な流れや空間的な広がりをもつ具体的な現実が抽象化され、提示されることになる、この再構成という作業にこそ、プロセスとしてのエスノグラフィーの本質があるであろう。そして、その再構成がうまくいっているということは、他者と理解がどれだけ共有できるのかどうかということであり、それは対象や事象を文字で記述しようが、視覚的な像で描写しようが変わりはないと思われる。

それならば、視覚的な像、しかも時間を捨象した静止画像で積極的に描写する意義というのは何であろうか。本発表におけるフォト・エスノグラフィーは、文字を用いて言語で記述することが中心的になる従来のエスノグラフィーのやり方と、一見すると異なる印象をうけるものであるし、異なるものであることを目指すことを試みているが、その違いが何かというと、すぐに思いつくことは、複雑で、うまくいかない場合には冗長になりやすい言語的な説明という手段をとらずに、視覚的に具体的に細部を描写することができ、かつ効果的に他者に伝え、理解を共有する機会が増大する可能性が開かれるという点にあると想像することができる。

だが、言語で構成されるエスノグラフィーと根本的に、かつ本質的に異なるものであるのかといえば、その問いかけに対しては、そうではないという答えしか現在のところ見出せていないのも実情である。なぜならば、繰り返すが、フォト・エスノグラフィーといえども、調査者が経験した具体的な現実を再構成する際に抽象的な論理思考（しかもそれは言語運用能力を土台とする）を行っているというふうに考えることは、フォト・エスノグラフィーは、従来のエスノグラフィーの単なる代替物なのではないかという印象につながってくるのである。そうであるならば、なぜあえて写真にこだわるのか。したがって、フォト・エスノグラフィーという方法に、学術的に積極的な意義を見出すことができていないという批判を想像するのは難くない。

また、写真が現実を記述するのに最適なものかという根本的な問題もある。たとえば、夕焼けの写真の議論をしたゲルノート・ベーメにみられる現象学的立場において、時間に非関与の写真は、現実を表象すること、あるいは、生きられる主体の体験を記述することに対して、有効ではない[ベーメ2006]。時間に関与するためには動画像の方が良いであろうし、ベーメの立場では詩的言語が優位となる。

こうした課題とでもいうべきものに応えていくにあたり、写真でしかできない点とは何なのかという積極的な意味を見出していく必要があり、そのための基本的な理論的な考察をおこなっていかなければならない。ただ、エスノグラフィーの実践は、最終的には他者、それは、学術的な世界にいる人びとだけでなく、フィールドの人びと、一般の読者や視聴者、あるいは、異なった言語のなかで生活している人びとに伝えることを目的の一つとしているならば、写真などの視覚的な像を中心に構成されたフォト・エスノグラフィーであれば、その開かれる範囲は広くなると考えられる。なぜならば、視覚的な像は、テキストで書かれたものよりも多くの様々な人びとのアクセス可能だからである。ここに、テキストで対象を十分に記述できるものをあえて静止画像で描写す

ることの意味を見いだせるだろう。デジタル時代に生きる私たちは、今や容易に視覚的な像を日常生活において取り扱うことができる環境のなかにいる。視覚的な像によって編まれたフォト・エスノグラフィーは、エスノグラフィーの可能性を開くものと位置づけられるかもしれない。

参考文献

小田博志、2009、「『現場』のエスノグラフィー――人類学的方法論の社会的活用のための考察」、『国立民族学博物館調査報告』、85、11-34 頁。

ベーメ、ゲルノート、2006、梶谷真司・野村文宏・斉藤渉（訳）『雰囲気の美学――新しい現象学の挑戦』晃洋書房。

Atkinson, P. A., Coffey, A. J., Delamont, S., Lofland, J. and Lofland, L. H. (eds.) 2001 Handbook of Ethnography. London: Sage.

Van Maanen, John. 1996 Ethnography. In Adam Kuper and Jessica Kuper (ed.) The Social Science Encyclopedia(2nd ed.). London: Routledge. pp. 263-265.

Piette, Albert, 1992, La Photographie comme Mode de Connaissance Anthropologique. Terrain, 18, pp. 129-136.

Piette, Albert, 1993, Epistemology and Practical Applications of Anthropological Photography. Visual anthropology, vol. 6, pp. 157-170.

山梨県の中山間地におけるこれからの生活に関する一考察

小笠原輝・池口仁
山梨県富士山科学研究所

はじめに

人口の変動は環境の人口支持率と密接な関係をもち、それぞれの集団がそれぞれの環境下で利用可能な技術を用いながら適応してきた過程を強く反映している(大塚, 1995)。すなわち、あるまとまりをもつ地域の人口の経時的変動を知ることによって、それぞれの地域で暮らす人々がそれぞれの地域の環境にどのように適応してきたかを探る手がかりを得ることができると期待される(鈴木, 1973； 鈴木他, 1974)。我が国では 1950 年代以降、非都市部で人口が減少し続けている。すなわち都市域の機能の維持はそれ以外の地域の人口再生によって補われてきたのである。しかし、2014 年に日本創生会議・人口減少問題検討分科会から出された『成長を続ける二十一世紀のために「ストップ少子化・地方元気政策」』(通称: 増田レポート）では、2040 年までに日本各地の自治体の約半数にあたる 896 自治体の消滅可能性があると指摘されたように、こうした都市域を除いた地域の安定が問題となっている。

山梨県では戦後以降長期にわたって人口減少が続き、近年は少子高齢化と重なり居住の継続が危ぶまれる状況になってきている。山岳に囲まれ人の活動が地形により制限され非都市域の面積割合が高い山梨県では、都市の機能と安定した居住の継続の両立の維持には人口の地域的安定の意義が大きい。過疎問題、中山間地問題の進行はそれぞれの地域社会で異なっている。地域の産業の興隆や観光資源の分布と利用、その歴史的な経緯、中核的な都市間を結ぶ交通インフラとの接続などによって大きく左右される。結果として山梨県には人口が比較的安定な地域と急速に減少した地域がみられる（小笠原, 1999)。

方法

本研究では、これらの現象を記述するため地域に定着して生活と居住が継続することを「定住」と呼び、この定住という概念を中心に据えて地域社会の理解を進めることを目的とした。この研究では、定住をのぞましいものと考え、その理解のために、山梨県の山間の集落での定住の現況を調査した。さらに定住の変化の記録を資料から調査し、山間集落の間で比較した。これをもとに自然的・社会的条件に適応した定住が明らかになる。人口の変化と定住の関連の差異を記述することを試みる。

具体的には、西桂町下暮地、山中湖村平野、早川町五箇、甲府市中道（中畑・心経寺) の４集落を調査の対象とした。これは、自然環境、社会基盤、産業、大都市との関係などの条件が大きく異なり、本研究の目的に沿うと考えられたからである。概況調査の後、聞き取りなどの現地調査と第二次世界大戦後の定住の変化を資料から調査・分析を行った。

結果および考察

現地調査からは、いずれの集落も現在の居住域の外に人の活動の痕跡が残る領域が広くみられ、急速に人の活動域が空間的に

狭まっていた。また、集落が相対的に安定して維持されている場所では森林管理の頻度が高いと考えられた。リモートセンシングを用いた調査とこれまでの調査検討の対照を行った結果、山中湖村を除く地域では森林率の増加が確認された。これは現地調査で人の活動域が狭まったことを追認されたものと考えられる。

都市から離れている山間地では人口の社会現象が止まりつつある。早川町と山中湖村がこの類型に相当する。両集落では、社会人口減の大きな時代には見られなかった家屋の補修など長期的に居住するための投資、新たな移入者の別荘地への移住がみられた。

地域社会とその交通基盤の結びつきから集落間のリンク概念図（図１）を作成した。これは地域社会の定住とより広域の社会との交流の様式化による。山間地である早川町や山中湖村では道路で集落間のリンク（つながり）が形成されている。いっぽうで、甲府市中道では広域農道の完成でこうしたリンクが補強されたものの集落との関係性が弱く、西桂町では行き止まりとなっており、これらの二つの都市近郊農村集落では人口流出が続いている（図２）。

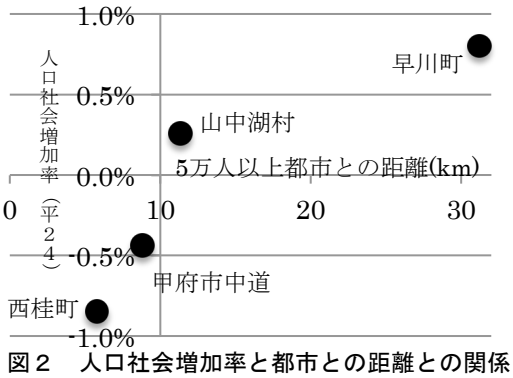


図２　人口社会増加率と都市との距離との関係

地域社会の基盤となる細やかなリンクの形成とリンクに沿った居住がいずれの集落にもみられた。このようなリンクには、リンクを通って集落を通過する道路利用者があること、災害時などの際には避難と救援が一方向に限定されないことなどの定住上のメリットが存在すると考えられ、集落の形態の違いが人口の安定に関与していることが示唆された。住宅への投資などにより定住の意思が明らかな場合には、リンクのインフラストラクチャーとなる道路への投資の可能性や、集落のコアとなる施設の立地などを検討する価値があると考えられる。

参考文献

日本創成会議・人口減少問題検討分科会　提言「ストップ少子化・地方元気戦略」提言　http://www.policycouncil.jp/pdf/prop03/prop03.pdf　(2016. 7 閲覧)

小笠原輝, 本郷哲郎, 佐藤香織　1999　「人口の経時的変動からみた地域特性の把握：山梨県における市町村別分析」『日本民族衛生学会誌』65-5, pp249-261

大塚柳太郎　1995　「環境と人口」　秋道智彌, 市川満雄, 大塚柳太郎編『生態人類学を学ぶ人のために』pp238-256, 世界思想社（京都）

鈴木継美　1973　「人の群れと場について」『東京医学』81,　pp107-119

鈴木継美, 松山恒明　1974　「地域人口構造の解析」『日本民俗衛生学会誌』21, pp561-567

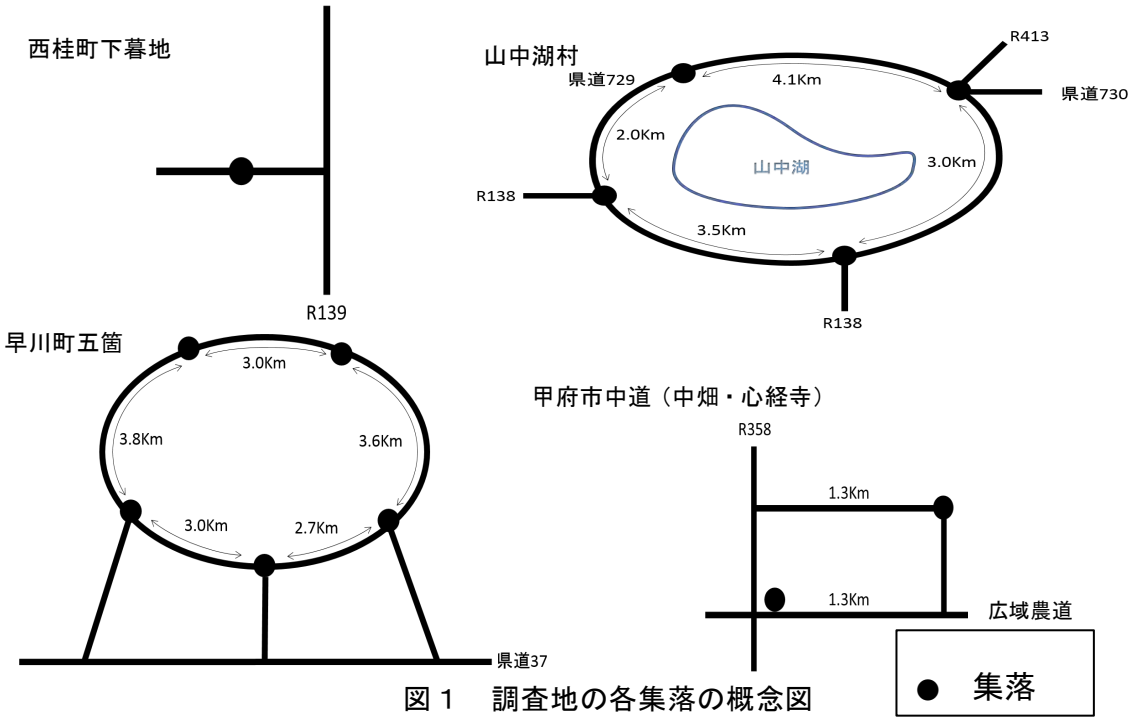


図１　調査地の各集落の概念図

徳島県西部山間地におけるイモ類の貯蔵技術

成澤徳子
日本学術振興会／
京都大学東南アジア研究所
宮田寛章
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

１．はじめに

本稿では、徳島県西部山間地におけるイモ類の貯蔵技術や食文化について概説し、その技術の衰退と地域の農業史や生活史との関係、及び今日におけるイモ類の貯蔵技術保全の意義について考察する。

２．調査地概要と調査方法

徳島県西部の山間部は、急峻な山と深い谷で構成される入り組んだ複雑な地形で知られる。冷涼多雨で日照時間の少ない、山の中腹の斜面に張り付くように集落が形成され（写真 1）、家屋の周囲の標高 300～700 メートル、斜度 15 度以上の急傾斜地で農業がおこなわれている。

この傾斜地農業には、採草地から刈りだし束にして乾燥させた茅（敷草）の利用（写真 2）や土揚げ（写真 3）といった農作業、またそれらの作業をおこなうための農具（写真 4）に特徴があり、それらを用いて、土地に適した多様な作物が栽培されている。その代表的な作物のひとつが、サツマイモやサトイモ、コンニャク、ジャガイモ等のイモ類である。

調査は、2016 年 2～3 月、徳島県美馬郡つるぎ町及び三好市において、サツマイモやサトイモを貯蔵するための芋穴を所有する計 5 世帯の住人を対象に、イモ類の栽培と貯蔵方法に関する聞き取りと参与観察をおこなった。

写真 1．つるぎ町半田葛城集落

写真 2. 採草地から刈りだされ「クロ（束）」にされた茅

写真 3．斜度約 35 度の畑での土揚げ作業

写真 4. 草取りや芋掘りに使う農具「ササバ」を作る野鍛冶

３．イモ類の栽培と環境認識

傾斜地におけるイモ類の栽培に関して、調査地の住人の間では、例えば「傾斜があるので水はけがよく、イモの栽培に適している。平地だと大きな畝を立てなければならない」、「土が良い。鳴門（地方）のように砂地ではないけれど、石礫が多くて水はけが良い」、「カゲヂ（陰地）のイモは質が良い。ヒノヂ（陽地）のイモは蔓が繁って質が良くない」といった一般的な認識がある。

イモ類の栽培適地に関して、住人の間ではまた、「あそこの石垣の下の黄色い土が良い。普通は黒い硬い土でテーラーで引かないといけないが、あそこの土は鍬で掘れるほど柔らかい。あの『ボケ土』でないと、サツマイモがうまくならない」、「家の裏の赤土で、浅い土で作る。イモが甘くなる。痩せ地だから良い」といったように、各々の経験に基づく、より具体的な土地の選択がおこなわれている。

４．イモ類の貯蔵技術

4.1. 芋穴の設置場所と構造

この地域では伝統的に、サツマイモやサトイモは、種芋、食糧用ともに、芋穴（もしくは芋壺、芋風呂）と呼ばれる貯蔵庫に貯蔵されてきた。各家庭の芋穴は、家屋の建立と同時に、家屋内で囲炉裏が置かれる「ナカノマ」や「オモテ」、もしくは家屋外の「ムシヤ」に設置される（写真 5）。一方、コンニャクは、昔は囲炉裏のある部屋の梁の上に棚をつくり、乾燥中のタバコの脇に貯蔵されたが、現在は納屋に保管される。ジャガイモは、納屋やその他の冷暗所に置かれ、むしろ等を被せて芽が出ないよう保管される。

芋穴の構造は、単純穴のほか、石積みを赤土でつないで造られる。穴の形状は、長方体型か丸穴型である。穴の大きさは各家庭で異なるが、一辺の長さは大きい穴で約 2m、小さい穴は約 1.2m である。これらの穴に貯蔵できるイモの量は 100～500 kg程である。

写真 5. 左がさつまいも用、右がサトイモ用の芋穴（中央は囲炉裏跡）

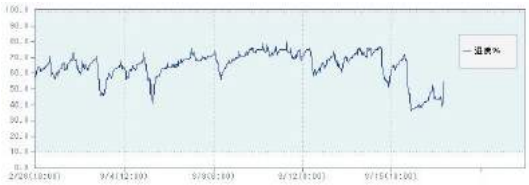
家屋内の床上や家屋外の納屋と比べて、芋穴は、一定の低い温度と高い湿度を保つことでイモの腐敗を防ぎ、イモを長期間貯蔵することができる。実際、家屋内と芋穴内の温度と湿度をそれぞれ、ロガーを用い

て計測し比較した（図 1、図 2）。その結果、芋穴の外気の温度と湿度が日時によって刻々と大幅に変動するのに比べ、芋穴内の温度と湿度の変動幅はより少なく安定的であることがわかった。

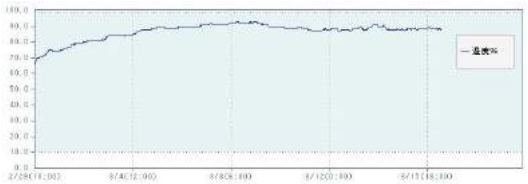
（↑三好市池田 U さん宅室内温度）

（↑三好市池田 U さん宅芋穴内温度）

図 1．芋穴内外の温度



（↑三好市池田 U さん宅室内湿度）



（↑三好市池田 U さん宅芋穴内湿度）

図 2．芋穴内外の湿度

4.2. 貯蔵方法と芋穴の管理―サツマイモを例に

芋穴へのサツマイモの貯蔵手順は、以下の通りである。1）芋穴上に位置するむしろ（畳）をはぎ、板の間の板を開ける。2）芋穴の内壁（周囲と底）に茅の束を敷き詰める。3）茅の上に稲わらを敷き詰める。4）芋穴の底にもみぬかを敷き、その上にイモを平らに並べて置く。5）節を抜き側面に複数の穴（直径約 1～8cm）を開けた孟宗竹の筒を、芋穴の中央に立てる（写真 6）。6）再びもみぬかを入れ、イモを置く。もみぬか投入時には適宜、おがくずも入れる。7）作業 6 を繰り返してイモを入れ終えたら、稲わらを被せて木蓋をし、板の間の板とむしろを元に戻す。

芋穴は、10 月に収穫したイモを入れてから、3 月末（近隣の山桜の開花が指標となる）にイモをすべて取り出してイモふせ（苗立）をおこなうまで、イモの腐敗を防ぐために適切に管理する必要がある。イモ貯蔵中の芋穴の管理方法には、例えば次のような作業がある。1）換気（ガス抜き）のために、時折、木蓋を開閉する。2）食糧用のイモの取り出しや換気の際に、イモの状態（芋肌の湿り具合、腐敗やネズミによる食害の有無等）を確認する。3）気温が上昇する 3 月には、木蓋を半開もしくは全開にして、温度、湿度、ガス組成の調整をおこなう。

写真 6．芋穴にイモを並べて置き、筒を中央に立て、もみぬかを入れる作業

各家庭におけるイモの貯蔵作業は、基本

的には女性の仕事であるが、貯蔵するイモの量が多い場合は男性もおこなう。こうした貯蔵技術は、各家庭で微妙に異なり、実家の母や嫁ぎ先の姑の手伝いを通じて、代々受け継がれるものである。また、継承された技術は不変ではなく、その年のイモの貯蔵状態や、近隣の家庭のやり方を参考に、新たな貯蔵方法が試行され採用されることもある。

4.3. 生芋の加工保存―サツマイモを例に

調査地域には、焼き芋やふかし芋だけでなく、切り干し、芋飯、芋団子、芋焼酎、芋粉、芋飴など、サツマイモに関する多様な食文化がある。なかでも切り干しは、他のサツマイモ加工食が見られなくなった現在でも、住人の間で親しまれている食べ方である。

切り干しには、輪切りにし穴を開けて藁に通した生芋を､軒下で天日干しにする｢白切り干し」と、大釜の熱湯で炊いてから干す「ゆで干し」（写真 7）の 2 種類がある。

写真 7. サツマイモの「ゆで干し」

干して間もないやわらかい切り干しは、食事前のおやつや夜食として、そのまま数切れつままれる。固くなった切り干しは、約 1 時間弱火でじっくり炊くと、やわらかく甘くなる。小豆と一緒に炊いて食べられることも多い（｢いとこ煮｣）。

５． 芋穴利用の衰退―農業史と生活史との関連

調査地域に現存する芋穴は少ない。農家では、サツマイモの種芋は、スチロール箱に入れてこたつの中や冷蔵庫横に貯蔵され（芋穴での貯蔵に比べて腐敗率は高い)､食糧用は納屋で保管されるのが一般的となっている。以下では、芋穴利用の衰退の背景について考察する。

当該地域の農業は従来、主要な換金作物であるタバコ中心の作付体系であったため、1960 年代以降、タバコ栽培の衰退によって農業全体が衰退した。過疎高齢化による農業の担い手の減少も、年々深刻な状況となっている。こうして当該地域では、芋穴に主に貯蔵されるサツマイモの生産量が大幅に減少した。また、サツマイモの苗は、流通量が増加して町での購入が容易になり、各家庭において種芋を確保する必要がなくなった。

一方で、農業規模の縮小により、農家では人夫や住み込みの手伝い人が不要となり、就学・就労のための地域外への家族の転出が増加した。こうして家族規模が縮小したことで、イエ制度が崩壊し、各家庭におけるイモの貯蔵技術の継承が困難となった。

加えて、家族規模の縮小による住居構造の変化（囲炉裏の衰退）や、食生活の変化（購入可能な食料品の増加）によるサツマイモ消費量の減少も、芋穴利用の衰退の要因として考えられる。

６．今日におけるイモ類の貯蔵技術保全の意義

少ないながら現存する芋穴は、それを保有する農家における通常時の種芋や食糧確保のほか、以下のような役割を果たしていることがわかった。

第一に、芋穴でのサツマイモ貯蔵は、災害時などに脆弱性の高い世帯における食糧安全保障の機能を果たす場合がある。例えば、2014 年 12 月初旬の大雪時、徳島では県西山間部を中心に、計 876 世帯 1,550 人が孤立状態に陥った。芋穴を保有する三好市池田の女性Ｕさんは、この災害時を振り返り、以下のように語った。「大雪のとき、孤立して停電も 10 日間続いた。オール電化にしていたので困ったけれど、芋穴のサツマイモと切り干しをクド（かまど）で炊いて食べて問題なかった」。

第二に、芋穴は、サツマイモの在来品種の保全に貢献している。この地に伝わる「黄金芋」や「赤芋」、「紫芋」、「護国芋」といった在来品種の苗は、市販されておらず自前で作らなければならないが、大量の苗を安定的に作るためには、芋穴での種芋の貯蔵が不可欠である。

芋穴を保有する上述のＵさんも毎年、在来品種のサツマイモを栽培し、自家消費量をはるかに超える量を収穫している。彼女はその生芋の多くを、農業を営まない遠方の親戚だけでなく、近隣に住む大勢の農家に贈与している（図 3）。

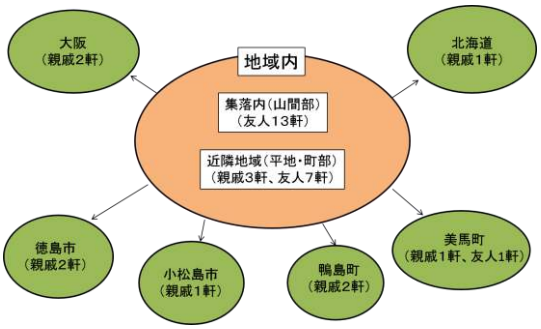


図 3. 収穫したサツマイモの贈与先（三好市池田Ｕさんの事例）

サツマイモの在来品種の栽培は、例えば「護国芋」は切り干しにすると美味しいイモ、「紫芋」は餅の着色に用いるイモといったように、特定の用途と結びついている。従って、芋穴を保有しない農家は、必要な在来品種の生芋を、芋穴を保有する農家から譲り受けている。親戚や友人に在来品種の生芋を分け与え喜ばれることが、芋穴を利用する農家が僅かながら存在し続けている背景にある。芋穴利用が当該地域から完全に廃れれば、在来品種の苗が失われ、同時に、その食文化も失われることとなる。

７．まとめ

調査地域でかつて、種芋や食糧の確保のために利用されていた芋穴の役割は、基本的には各世帯内で完結したものであった。一方、芋穴は現在、それを保有する農家だけでなく、いわば「地域の芋穴」として、当該地域における非常時の食糧確保や、種芋の保管庫、在来種の保全、及び在来種に関連する食文化の保全の役割を担っているといえる。

なぜ家畜飼育と農耕をともにするのか
―内モンゴルの定住牧畜民の事例から

フフアグラ（青山）
東北大学大学院環境科学研究科

1. はじめに

従来の内モンゴルの牧畜研究の代表的なものとしては、20 世紀前半の植民地時代の牧民生活の調査、特に満鉄の報告書などが挙げられる。しかし、近年は、内モンゴル牧畜社会の生活様式や生業転換についてサイン（1998）、小長谷（2001）の研究、環境破壊や開発に関する尾崎（2006）の研究、資源利用と現代的変容に関する児玉（2012）の研究など少なくない。しかし、これらの内モンゴルにおける牧畜研究を概観してみると、定住牧畜モンゴル人の牧畜業と農業の依存関係を明らかにしてない。

以上の研究を踏まえ、本稿では、定住牧畜モンゴル人は、なぜ家畜飼育と農耕を共にするのかという問題意識を持ち、モンゴル人の牧畜と農業からなる生業に着目し、彼らは人民公社の解散後、社会主義市場経済を取り込んだ社会の中で、その生業文化を自然・社会環境にどのように対応させてきたのかを分析し、モンゴル牧畜研究に新たな資料と視点を提供することを試みたい。

2. 定住牧畜モンゴル人とはだれか

2.1. 定住牧畜モンゴル人

本研究の対象は、従来の大草原の遊牧民という本質化したモンゴルイメージ（シンジルト 2003：77）により描かれたモンゴル人と生業方法が異なる「半農半牧モンゴル人」、すなわち牧畜のみならず農耕も行うモンゴル人である。本稿で、定住牧畜モンゴル人あるいは定住牧畜民と表現する。

内モンゴルの定住牧畜モンゴル人たちは、1949 年の中華人民共和国成立以来、激しい社会環境の変化を経験してきた。1958 年に人民公社が設立されたが、1980 年代の改革開放により人民公社が解散し生産責任制が導入され、1982 年には正式に家畜の私有化と土地の分配が実施された（郝・包 2010：82）。生産責任制の導入によって 1990 年代には、内モンゴル自治区全体の家畜飼育頭数や農耕地が増加する一方、砂漠化の進行は深刻さを増した。中国政府は「西部大開発」というプロジェクトを行いつつも、破壊された生態系の回復や破壊を未然に防ぐため
2002 年に「退耕還林・退牧還草」の政策を実施した（淡野　2011：53）。この政策に従って、内モンゴル東部地域では家畜の放牧を禁止し、家畜の舎飼いを推進した。

このように変化しつつある内モンゴル・ホルチン地域の定住牧畜モンゴル人は、2015 年現在、砂漠化や放牧地の縮小、採草地の消失などにより家畜の飼料として主に栽培物を利用するようになった。また、環境回復のための「退耕還林・退牧還草」の政策により、放牧が季節的に禁止され、家畜を舎飼いすることが起きている。

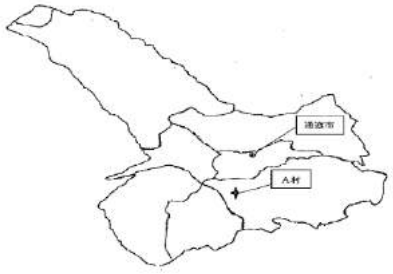


図 1.　A 村の地理的位置（1：50ｋｍ）

2.2. ホルチン左翼後旗

本稿では、中国内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼後旗のモンゴル人集団居住地である A 村の定住牧畜モンゴル人を事例とする。

ホルチン左翼後旗は内モンゴルの東南部に位置し面積は 11535 ㎢、 海抜 200－500mの台地が広がるホルチン砂漠地域の一部であり、固定砂丘や半固定砂丘、それらに囲まれた平地の草原などからなる。大陸性気候であり、年平均降水量は 358－483 ㎜である（ホルチン左翼後旗誌 1993：131－133)。ホルチン左翼後旗の人口は 40.6 万人（モンゴル族は 73.9%を占める、2005 年）である。

A 村は、ホルチン左翼後旗の北西部に位置し、漢族居住地と隣接する。2013 年の人口は 855 人（モンゴル族)、 270 世帯、面積は約 405800ａ、家畜総数 3742 頭で、その内訳はウシ 2834 頭、ヒツジ 811 頭、馬など 97 頭となっている。

3. 定住牧畜モンゴル人の農牧生業

3-1. 定住牧畜モンゴル人の家畜飼育

モンゴル人が飼育してきた主な家畜とは、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダである。これらの五畜はモンゴル語でマル（mal）とよばれる。しかし、この地域ではマルと言えばウシだけを指す。

写真 1. 夏季の牛放牧

A 村の定住牧畜民は、主にウシとヒツジを飼育している。しかし、ウシの数が圧倒的に多く全家畜の 7 割以上を占め、ヒツジは 2 割程度である。平均すると一人あたりウシ 3 頭、ヒツジとヤギを合わせて 1 頭にも満たない。これはこの地域に家畜として主にウシを飼育することによって、五畜を指すマル（mal）がウシだけを指すようになったと考えられ、この地域の家畜飼育の特徴であるといえる。

表 1.から見ると、A 村の家畜における飼育のあり方としては放牧と舎飼いを結合する形になっている。牧畜禁止期の 3 月

表 1. 季節ごとの放牧の方法（調査より作成）

四季	月	時期	オスウシ	メスウシ	ヒツジ＋ヤギ	ウマ
春	3.4.5	放牧禁止期	舎飼い	舎飼い	舎飼い	舎飼い
夏	6.7.8	6 だけ禁牧	舎飼い・放牧	6 除き放牧	6 除き放牧	6 除き放牧
秋	9.10.11	放牧期	舎飼い・放牧	放牧	放牧	放牧
冬	12.1.2.	放牧期	舎飼い	舎飼い	舎飼い・放牧	舎飼い放牧

から 6 月までを除き、他の時期には全ての家畜が放牧可能である。しかし、牧民たちには自分なりの飼育方法があり、自分の都合により放牧と舎飼いを結びつけて飼育することもこの地域の一つの特徴になる。

写真 2.　舎飼いする牛

家畜の飼料は、夏の時期は牧草地に生える草、冬期は草刈で得た乾草が一般的である。しかし、A 村においては、草刈りはしないため、冬期は家畜にトウモロコシの茎或いはトウモロコシの茎を発酵した飼料を食べさせる。また、家畜全般にトウモロコシ実を食べさせ、ウシやヒツジ、ヤギには専業的な化学配合飼料も食べさせる。

写真 3.トウモロコシの茎を食べている牛

次に、家畜飼育の在り方について事例を提示する。

【事例 1】ＨＬ氏 42 歳、学歴は高校卒業。彼はオスの肥育ウシ 16 頭、メスウシ 16 頭、ヒツジ 16 頭飼育している。ウシを性別と飼育方法の違いにより畜舎を分けている。オスは舎飼いし、一日中畜舎から出さずに飼育する。メスは午前中に畜舎から追い出して放牧し、午後は舎飼いする。彼の話によると、一日に一頭のウシに 30 kg のトウモロコシの茎で作った飼料、そのほかにオスウシには 2－3 kg（メスは半分）のトウモロコシの実、1 kgの化学配合飼料を与えている。このようなオスの飼育の飼料代としてトウモロコシの茎で作った飼料以外に一日に 10 元（150 円）ほどの飼料代が掛かるために、3 ヶ月間の飼育を通じて得る利益は少ない。そのためウシの取引と化学配合飼料の販売にも従事している。

また、彼は、334a の畑でトウモロコシを栽培し、茎を飼料として利用し、2 万ｋｇの収穫の半分を売り、半分を家畜に与えている。その上に、16000ｋｇから 20000 kgのコーンサイレージを栽培している。

この事例から、ウシに一日約 30 kgのトウモロコシの茎と平均的に 1.5 kgのトウモロコシを与えると計算すると 12 月から 6 月までの半年に一頭あたり 5400 kgのトウモロコシの茎とト 270 kgウモロコシの実を食べることになる。このことから、調査地において、家畜飼育に栽培物のトウモロコシが大量に利用されている様子が明らかになった。従って、調査地の牧畜の飼育には栽培物が欠かせない役割を果たしおり、牧畜が農業に依存すると指摘できる。

これが、本調査地における牧畜の一番大きな特徴である。

写真 4.トウモロコシの実を食べている牛

を燃料として使用するなど多様に利用できる。

写真 5.　トラクターで種まきをする

3.2　定住牧畜モンゴル人の農業

清末民初の時期に遊牧モンゴル人の一部は定住し、内モンゴル地域の開墾によりモンゴル人の生業に変容が起こった。その結果、この地域ではモンゴル人も積極的に農耕を行うようになり、農業の技術が進歩し、蕎麦とキビに加え、さまざまな作物を栽培するようになった（サイン 1998：214－215)。

村の人たちの話によると、人民公社の時期には高粱、トウモロコシ、緑豆や大豆などの穀類を栽培するようになった。当時はウシの力を利用して鋤きを引き、灌漑がなく天水を利用していた。そのうえ、砂丘の砂漠質の農耕地に頼り、肥料も普及せず生産性の低い農耕が行われていた。

現在、農耕において、人力や家畜の力を用いることは少なくなり、トラクターなどの機械を主に利用し、栽培作物として生産性や利用の多様性が高いトウモロコシを主に栽培するようになっている。トウモロコシは、茎を家畜の飼料にする、果実を粉にして家畜の飼料にする、茎や果実の軸棒

本調査における定住牧畜モンゴル人は砂丘的な農耕地の利用が多く、一人当たりの農耕地は 35ａである。1ａの農耕地にトウモロコシを栽培すると、年間 60－70ｋｇ収穫できる。トウモロコシの実を 1ｋｇあたり 1.7 元と計算すれば、35ａから 4165 元（約 7 万円）の収入を得ることになる。

A 村において、牛一頭は約 8500 元（約 14 万円）で取り引されるため、牛一頭の収入は 70a のトウモロコシの収入と等しい。以上から、牛飼育から得る収入は農業収入を上回ることが分かる。

A 村において地下水を用いた灌漑が利用されているが、降水量が少ない年は農業の生産性が半分ほどに落ちることがある。なぜなら、地下水の灌漑は天水のように効果はなく、その上、一回の灌漑に使う労働力や軽油代などの支出が高いために容易におこなうことはなく、天水を待つことが多いのである。

しかし、本調査地における、トウモロコシ栽培の目的は、単に生産性が高いではな

く、家畜の主たる飼料としてトウモロコシの茎や果実を得るためである。これが当地域の農業の特徴であると言える。

写真 6.　トウモロコシの灌漑

4.　まとめ

内モンゴル・ホルチンの定住牧畜モンゴル人は、清末民初から定住し、遊牧から農牧へと生業を転換してきた。中華人民共和国の成立、人民公社の解散など内モンゴルの定住牧畜モンゴル人は激しい社会・自然環境の変化に適応してきた。人民公社解散後は、家畜の飼育は小規模で牛を中心とするようになり、飼料として栽培作物を用いる形になり、飼育方法が放牧牧畜から舎飼い牧畜へと転換した。

定住牧畜モンゴル人の農業は、食料生産にとどまらず家畜の食糧を獲得するためにトウモロコシを中心に栽培し、より集約的になってきている。

また同時に、定住牧畜モンゴル人は生業において、経済的な収入を向上させるために家畜飼育と農耕を共にする戦略を取っている。そのために、この地域は生産方式として農耕と牧畜が併存し、農業と牧畜がお互いに依存する地域である。

参照文献

和語の文献（五十音順）

尾崎孝宏 2006「モンゴル国東部牧畜地域における開発と移住」 伊藤亜人先生退職記念論文集編委員会（編）『東アジアから人類学―国家・開発・市民―』（207－222）風響社

児玉香奈子 2012『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容―オルドス地域農耕民とゴビ地域遊牧民の事例―』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 1　アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会

小長谷有紀 2001a「定住化過程におけるモンゴル族の牧畜経営」、佐々木信彰（編）『現代中国の民族と経済』（185－207）世界思想社

シンジルト 2003『民族の語りの文法―中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社

淡野明彦、淡野寧彦 2011「中国内モンゴル自治区における「退牧還草」政策による牧畜（遊牧）業の変化に関する考察」　『奈良教育大学紀要』第 60 巻（42－62）

中国語の文献（アルファベット順）

郝亜明、包智明 2010『体制政策与蒙古卿村社会変遷』　中央民族大学出版社

科爾沁左翼後旗誌編纂委員会 1993『ホルチン左翼後旗誌』　内蒙古人民出版社

色音 1998『蒙古遊牧社会変遷』　内蒙古人民出版社

バカ・ピグミーのキャンプ跡に再生した野生ヤム個体群の遺伝系統分析

安岡宏和
京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科
Laure BENOIT
CEFE-CNRS, France
Nora SCARCELLI
IRD, France

１．はじめに

アフリカ熱帯雨林に住むピグミーにとって野生ヤム（*Dioscorea* spp.）は最も重要な食物の一つであり、おそらく、それなくして狩猟採集生活は不可能である（Headland 1987, Yasuoka 2006, Sato et al. 2014）。ところが、元来、野生ヤムは光条件のよい環境を好むため、熱帯雨林地域におけるその分布は人為の直接的・間接的な影響下で形成された可能性がある（Yasuoka 2009）。つまり、純粋な狩猟採集生活と考えられてきた生活は、じつは農耕等による大規模な植生撹乱によって可能になったのかもしれない。しかし、一方で、カメルーン東南部では、バカ・ピグミーが消費時に破棄したイモ片から、野生ヤムの群生パッチが再形成され、相当量の野生ヤムがそこで収穫可能だという例が報告されている（Yasuoka 2013）。

つまり、これまでの研究を整理すると、熱帯雨林における狩猟採集生活に不可欠な食物である野生ヤムのアベイラビリティの形成は、（１）人為の影響のない自然状態での拡散、（２）農耕等による大規模撹乱地への侵入、（３）狩猟採集民による消費に付随する拡散、という３つの要因のうち、どれによるものが大きいのか、ということが論点になっているわけである。

そこで本研究では、キャンプ跡から採取した野生ヤムの遺伝系統分析をおこない、バカによる採集・消費が群生パッチの形成にどの程度関与しているか検討し、上記の（３）の可能性について議論する。

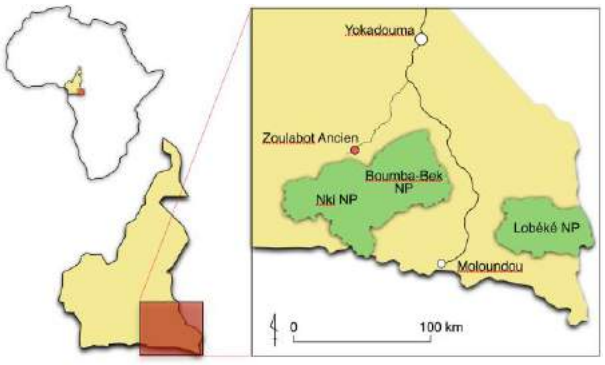


図１　調査地

２．調査地と方法

調査地は、熱帯雨林の広がるカメルーン東部州ブンバ・エ・ンゴコ県、ズーラボット・アンシアン村と周辺地域である（図１）。2015 年の村の人口は、バカ約 160 人、農耕民コナベンベ約 30 人程度であった。

バカは、モロンゴとよばれる長期かつ大規模なキャンプをおこない、大量の野生ヤムを採集・消費する（Yasuoka 2006, 2009）。野生ヤムには、幾つかの種類があり、分布様式も異なっているが、もっとも多く食べられる一年生のタイプは、森のなかにまんべんなく分布するのではなく、局所的に集中している（Yasuoka 2009）。キャンプ跡には、調理時に捨てられたイモの小片から野生ヤムが再生してくる（Yasuoka 2013）。

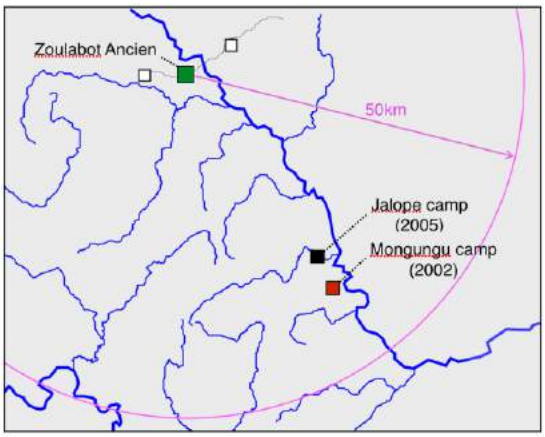


図２　サンプルを採取した２つのキャンプ跡

2012 年 6 月に、調査村の南南東 40km あたりに位置する、2002 年および 2005 年に実施され、大量の野生ヤムが消費された大規模キャンプの跡地（図２）をおとずれ、そこに生えていた野生ヤム全個体のサンプルを、FTA カードを用いて収集した。

本研究では消費量が最も多く、採取数も多かった *D. praehensilis* を分析対象とした（表１）。なお、２つのキャンプ跡は７km ほど離れていたが、キャンプ滞在時のヤムの収穫場所のほとんどは各キャンプから３km 内に分布しており、重複利用はなかった（Yasuoka 2006, 2009）。

表１　サイトごとのサンプル数

サイト	キャンプした年	採取サンプル数
Mongungu	2002	54
Jalope	2005	44
Total		98

遺伝系統分析では、まず、計 98 のサンプルから、各々７座のマイクロサテライト（MS）を抽出したうえで、

（1）MS 多型をもとに、DarWin（http://darwin.cirad.fr/）をもちいて、近隣結合法によって遺伝系統樹を作成し、

（２）Fstat（http://www2.unil.ch/popgen/softwares/fstat.htm）をもちいて、MS アレル（対立遺伝子）ヘテロ接合度が、Hardy-Weinberg 平衡（HWE）からが逸脱しているかどうかを検定した。

HWE から逸脱している場合、そこでは任意交配が実現しておらず、つまり、異なる遺伝系統群が混在していることになる。

３．結果

図３にしめすように、分析したサンプルの遺伝系統とサンプル採取サイトとの対応はみられず、またサイトごとのサンプル集団の分化度は小さかった（Fst=0.01）。すなわち、異系統の個体がごちゃまぜに混在しているために、両サイトにおける個体群の組成が類似している、という結果になった。

つぎに、７座の MS アレルにおけるヘテロ接合度の HWE 逸脱を検定すると、Mongungu サイトでは４つ、Jalope サイトでは１つで期待値より有意に低い値をしめした（表２～５）。サンプル内に異なる遺伝系統群が混在しており、互いに遺伝的な交配が限定されている場合には、このような結果になるが、Mongungu サイトでは、とりわけこの傾向が強かった。

４．考察

２つのキャンプ跡に収穫されて持ち込まれたイモの採集場所には重複がなかったことから、サンプルの遺伝系統とサイトとの

表2　MS座ごとサイト毎のアレル数

Locus	Mongungu	Jalope	All
3D06	8	6	8
YM13	10	12	13
3F12	5	5	5
2C05	22	19	26
3B12	7	5	7
3F04	9	9	12
1F08	11	9	11
Average	10.3	9.3	11.7

表3　期待されるヘテロ接合度（H_s）

Locus	Mongungu	Jalope	All
3D06	0.69	0.56	0.63
YM13	0.77	0.77	0.77
3F12	0.61	0.62	0.62
2C05	0.88	0.83	0.86
3B12	0.65	0.49	0.57
3F04	0.69	0.76	0.72
1F08	0.83	0.84	0.83
Average	0.73	0.70	0.71

表4　観察されたヘテロ接合度（H_o）

Locus	Mongungu	Jalope	All
3D06	0.70	0.55	0.63
YM13	0.65	0.77	0.71
3F12	0.13	0.39	0.26
2C05	0.89	0.84	0.86
3B12	0.58	0.53	0.55
3F04	0.73	0.68	0.70
1F08	0.70	0.87	0.78
Average	0.63	0.66	0.64

表5　観察値の期待値からの偏差（F_{IS}=1-H_o/H_s）

Locus	Mongungu	Jalope	All
3D06	-0.02	0.03	0.00
YM13	0.16*	0.00	0.09
3F12	0.78**	0.38**	0.59**
2C05	-0.01	-0.01	-0.01
3B12	0.11**	-0.06	0.05**
3F04	-0.05	0.10	0.02
1F08	0.15**	-0.04	0.07*
All	0.14**	0.05**	0.11**

*p<0.05, **p<0.01

あいだには、対応関係があってよさそうである。ところが、図３にしめされているように、両者の対応関係はまったくなかった。つまり、この地域（２つのキャンプにおける収穫域）に分布していたヤムの遺伝系統は、そもそも錯綜していたことになる。

その理由としては、以下の２つの相異なるシナリオを考えることができる。

第一に、２つのキャンプの収穫範囲にある野生ヤム群生パッチ群間において遺伝的交配が非常に活発になされており、そのため、地域全体のヤム個体群が、１つの遺伝子プールといえる状況になっている場合である。

第二に、野生ヤム群生パッチ間の遺伝的交配は低調であるが、そのかわりに人為的な野生ヤムの移出入によって、この地域における野生ヤム分布が、異系統個体群の混交したモザイクになっている場合である。

現時点で確定的な結論をだすことはできないが、状況証拠からみて、後者の蓋然性が高いことを指摘しておきたい。

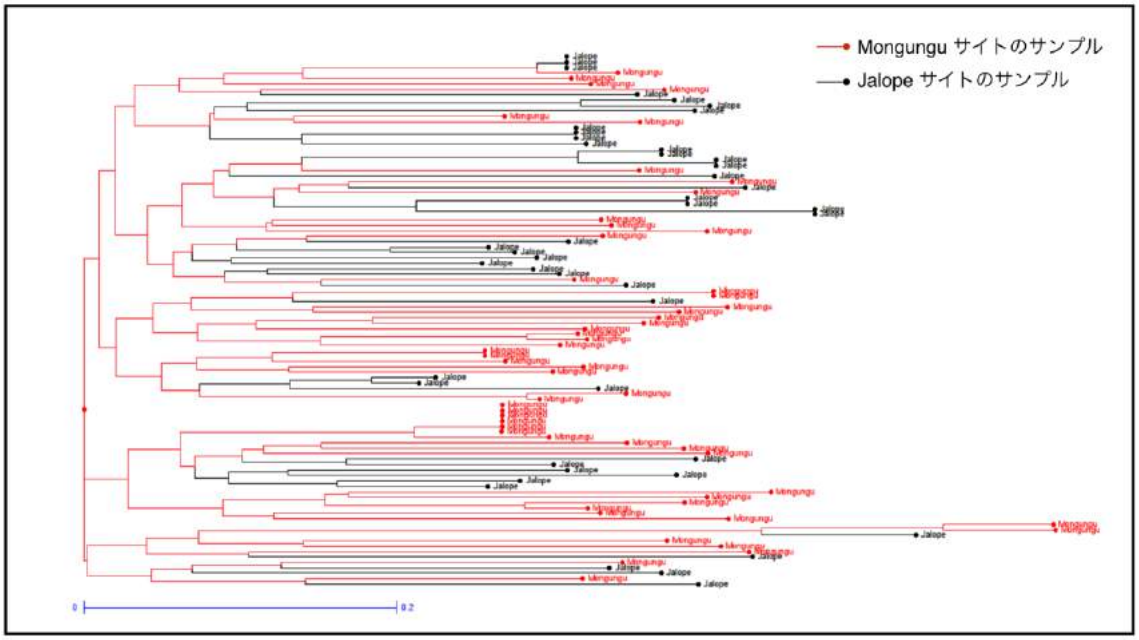


図３　サンプルのマイクロサテライト多型にもとに近隣結合法によって構築した遺伝系統樹。サイト毎に色分けしてある。

なぜなら、MS アレルにおけるヘテロ接合度の HWE 逸脱の検証から、サンプル内の遺伝的交配は限定されていること、すくなくとも活発なわけではないことが、示唆されているからである。もし、パッチ間の遺伝的交配が活発であるのなら、地域の個体群をみたとき、HWE が達成されているはずであり、そのときバカ達が収穫してきた個体から再生したサンプルにおいても、HWE からの大きな偏差はないはずである。あるいは、収穫と再生の過程で何らの偏りが生じていたとしても、短期間のうちに活発な種子繁殖がなされ、キャンプ跡に形成された個体群は速やかに HWE に達することが予想される。

ところが、とりわけ Mongungu サイトでは放棄後 10 年を経過してなお平衡に達しないほど、ヤム個体間の遺伝的交配が限定されていた。むろん、Jalope サイトでは 1 つの MS 座をのぞいて平衡に達していたことから、すくなくともサイト内においては、種子繁殖をとおした遺伝的交配が生じていることは確かである。したがって、Mongungu サイトにおいても、いずれ平衡に達するのであり、現時点はまだ途上にあるにすぎない、という可能性はある。しかし、Japlope サイトと比較して Mongungu サイトのほうが放棄後の年数が長いことに注意しなければならない。じっさい植生遷移にともなって光環境はすでにキャンプ跡でない通常の森林内と同等になっていることから（Yasuoka 2013）、ある時点から、種子繁殖した実生の定着率が減少し、遺伝的交配が緩慢になった、と考えるほうが妥当であろう。現地において定着したヤムの個体が観察されたのは、キャンプ跡内および外縁にかぎられていたことからも、種子繁殖による実生の定着率は光環境に大きく依存すると考えてまちがいない（Yasuoka 2013）。つまり、Mongungu サイトでは、このまま平衡に達することなく、異系統個体群が並存する状態がつづく可能性が高い。

以上から、上述した第一のシナリオが前提としている、調査地域全体において交配がなされ、パッチ間において活発な遺伝的交配が生じているのではなく、第二のシナリオが前提としている、パッチ間の遺伝的交配は低調であり、パッチ内においては Jalope サイトのように比較的早く平衡に達する場合があったとしても、条件によっては遺伝的交配が限定されていると考えられる。

５．結論

本研究では、調査地域の野生ヤムの群生パッチの形成にさいしては、限定的な種子繁殖のもとでの異系統群の混交が強く作用したことが示唆された。つまり、野生ヤムの分布拡大には、狩猟採集民によって採集・廃棄されたイモ片からの再生をとおしたパッチ形成が、相当程度、貢献してきた可能性がある。

冒頭で、アフリカ熱帯雨林における狩猟採集生活を実現可能にしている野生ヤムのアベイラビリティの形成プロセスについて、人為の影響の大小によって３類型をあげたが、そのうち、（３）狩猟採集民による消費に付随する拡散が、重要な役割をはたした可能性が高くなったといえる。

また、もしそうであれば、逆に、広域において野生ヤムの遺伝系統関係を分析する

ことで、野生ヤムを利用してきた人々の移動史を跡づけることができるかもしれない。

謝辞

本研究は、科研費（24710296）およびSATREPS（FOSAS Project）の資金援助による。

文献

Headland, TN (1987) The Wild Yam Question: How Well Could Independent Hunter-Gatherers Live in a Tropical Rain Forest Ecosystem? Human Ecology 15(4): 463–491.

Sato H, Hayashi K, Inai H, Yamaguchi R, Kawamura K, Yamauchi T (2014) A controlled foraging trip in a communal forest of southeastern Cameroon. African Study Monographs Suppl.47: 5-24.

Yasuoka, H (2006) Long-Term Foraging Expedition (Molongo) Among the Baka Hunter-Gatherers in the Northwestern Congo Basin, with Special Reference to the “Wild Yam Question”. Human Ecology 34(2): 275–296.

Yasuoka, H (2009) Concentrated Distribution of the Subsistence of African Rainforest Hunter-Gatherers. Human Ecology 37(5): 577– 587.

Yasuoka, H (2013) Dense Wild Yam Patches Established by Hunter-Gatherer Camps: Beyond the Wild Yam Question, Toward the Historical Ecology of Rainforests. Human Ecology 41:465–475

滋賀県高島市朽木のトチ餅づくりにおける灰の入手をめぐる課題

八塚春名
日本大学国際関係学部

はじめに

トチ（*Aesculus turbinata*）の果実はサポニンやアロインなどの有毒成分を含むため、縄文時代から人びとは水さらしや加灰といった方法でアク抜き処理を施して利用してきた（伊藤, 2011）。滋賀県高島市朽木で作られるトチ餅は、その調理過程で「灰合わせ」と呼ばれる灰を利用したトチのアク抜き処理がおこなわれる。長年、朽木のトチ餅生産者たちは、灰合わせのための灰を静岡県の鰹節生産地から購入してきた。しかし 2011 年の福島原発事故の後、それまでのように灰を購入することができなくなり、朽木でのトチ餅生産の継承が難しくなっている。本発表では、トチノミのアク抜きに利用する灰が入手困難である状況を事例に、地方山村の小規模事業をめぐって、資源の供給と利用が国内各地で連鎖していることを明らかにする。また、それゆえに、地理的に離れた地域で起きた事故によって、朽木の人びとの自然資源利用が間接的に大きな課題を抱えている点を指摘したい。

本稿は、滋賀県高島市朽木地区のトチ餅生産者と、静岡県の鰹節組合Ａを対象におこなった聞き取りによって得たデータをもとにしている。

1. 朽木におけるトチ餅づくりと灰利用

滋賀県高島市朽木地区は、滋賀県、京都府、福井県の県境に位置し、面積の 9 割以上を山林が占めている。朽木におけるトチ餅づくりについては八塚・藤岡（2015）を参考にされたいが、トチ餅を作る過程では、実と灰を湯でまぜて寝かせる「灰合わせ」とよばれるアク抜き作業が欠かせない（写真 1）。朽木において、トチ餅の味の善し悪しを決めるのは、灰合わせで使用する灰の質と、その際の温度管理だといわれている。灰合わせは熟練の技術であり、この技術が朽木で継承されていることこそが、今日まで続くトチ餅づくりの鍵である。現在、朽木では、トチノミ約 10kg に対して一斗缶 1 杯分（18ℓ≒12.6kg）の灰を利用してアク抜きがおこなわれている。

写真 1.　灰合わせ（左）とトチ餅（右）.

朽木の人びとが自家消費用に小規模にトチ餅を作っていた頃、各家庭は煮炊きにより生じた灰を利用してアク抜きをおこなっていた。しかし高度経済成長期以降、薪を使用する世帯は減少し、各家庭で灰を用意することは容易でなくなった。同時に、過疎化や高齢化が進み、人びとの山離れが深刻になり、トチノミ採集に出かける人びとが減少した。こうしたことから、昭和 30 年代にはトチ餅づくりそのものが衰退した。しかし、昭和 60 年代から、地域振興の一環として再びトチ餅が生産され、朝市や道の駅、さらには祭やデパートの催事などの場で販売されるようになった。

ところが、販売の機会とトチ餅の需要が増える一方で、生産者は高齢者ばかりであるために、生産量に見合うトチノミを自分たちだけで採集することが困難になった。その結果、朽木の餅生産者らは、他地域で採集されたトチノミを購入するようになった。同時に不十分であった灰も大量に購入しなければいけなくなった。

2. トチ餅生産者による鰹節工場の灰利用

こうした背景のもと、朽木の餅生産者らがトチノミのアク抜き用に購入するようになった灰は、静岡県にある鰹節組合 A(以下、組合 A) の工場において、カツオを蒸籠に載せて薪の火力でいぶす「焙乾」という工程で生じたものであった。鰹節製造において、薪を使った焙乾は、乾燥・殺菌・香味付けなどを目的とし、この工程は鰹節の品質を決定づける極めて重要なものである（北村, 2002)。現在、朽木のトチ餅生産者らは、組合 A の灰がトチ餅づくりにはもっとも適しているという。その第一の理由は、焙乾過程で利用される薪の樹種にある。組合 A は焙乾過程で鰹節に付く香りを重要視するために、薪の樹種をコナラとクヌギの 2 種に限定している。それら以外には焚き付け用としてサクラを使うのみである。コナラやクヌギといった堅木は、高温で長時間燃え続けるという利点があり、それゆえ細かい灰ができる。朽木のトチ餅生産者は、「堅木の灰、とくにコナラの灰がアク抜きには一番いい、スギやヒノキの灰はまったく使えない」と語る。

第二の理由は、焙乾の方法にある。組合Ａでおこなわれている焙乾で使用する設備には、焼津式乾燥庫、手火山式、手火山式が大規模に改良された急造庫の 3 つがある。聞き取りをした組合Ａの会員によると、これらのうち、手火山式と急造庫は細かくふわふわとした灰になり、トチ餅づくりには、この灰が最適である。

以上の理由から、組合Ａが最良の鰹節をつくるためにおこなう薪の選別が、朽木のトチ餅生産者の嗜好と合致した結果、トチ餅生産者たちは組合 A の灰を購入してきた。組合 A での聞き取りによると、朽木以外にも静岡、石川、兵庫や四国のトチ餅生産者ら、さらには陶器生産者（釉薬に利用）や京都の染物業者らも組合 A の灰を購入してきた。また、こんにゃくの加工や土壌改良材としても利用されてきた。

3. 原発事故による影響

組合Ａは長年にわたり、宮城、福島、群馬などの地域で伐採された薪を購入してきた。しかし 2011 年 3 月の福島第一・第二原発による事故後の 2012 年 2 月、林野庁は、静岡、長野、山梨、新潟以北以東の 17 都県から採取された原料から生産された薪や木炭等、あるいは 17 都県で保管された薪や木炭等の燃焼によって生じた灰を、食品の加工及び調理に用いることを自粛するよう通達した（林野庁, 2012)。以後、組合Ａは生産した鰹節の放射性物質を自主的に測定したり、当該地域以外での薪探しに奔走したりする一方で、食品加工を使用目的とする利用者への灰の供給を停止している。その結果、朽木のトチ餅生産者は組合Ａからの灰を購入できなくなり、「灰が手に入らなんだら（トチ餅づくりは）できん」と、必死に灰を探している。

聞き取りを実施した組合Ａの担当者は、

灰を供給できないことによって、これまで灰を購入してくれていた各産業の担い手が、仕事を離れることになってしまっていないかと危惧していたが、朽木のトチ餅生産者にとっては、まさに組合Aの灰の入手困難が、餅づくりを断念しかねない大きな痛手となっている。また、組合Aの灰に頼ってきた朽木以外の地域のトチ餅生産者らも、同様の状況に追い込まれていると推測できる。

4. 超地域的な資源利用の可能性と限界

現在の朽木におけるトチ餅づくりは、他地域で採集された実と生産された灰を購入し、そのうえで朽木のアク抜き技術を利用することで成立してきた。そして組合Aの灰は、宮城や福島からコナラやクヌギを購入することで生成されてきた。つまり、複数の地域が資源利用においてつながりあうことによって、朽木のトチ餅づくりは成立していた。こうした地域を超えたネットワークは、過疎・高齢化といった課題を抱える現代の山村において、資源利用を支える重要なつながりである（八塚・藤岡, 2015)。だからこそ、一地域で起きた事故が、朽木のように当該地域からは地理的に遠い地域へも間接的に影響を与えることになってしまった。

最後に、トチ餅づくりの継承の問題を指摘しておく。朽木のトチ餅生産を担う世帯は、2012年で6世帯、2015年には5世帯に減少し、いずれも70~80歳代の高齢者が餅づくりを担っていた。現在、これら5世帯のうち2世帯は息子や嫁といった後継者がいるものの、全体として餅づくりの技術継承は困難を極めている。そうした状況下でさらに灰の入手困難という問題が生じることによって、今後の餅づくりの継続は、一層難しいといわざるを得ない。

参考文献

伊藤由美子 2011 「青森県青森市三内丸山遺跡におけるトチノキ利用」『青森県立郷土館研究紀要』35: 43-50.

北村也寸志 2002 「かつお節製造における里山林利用―鹿児島県南薩地区を事例として」『環境社会学研究』8: 166-180.

八塚春名・藤岡悠一郎 2015 「山村の特産品づくりを支える資源利用ネットワーク―滋賀県高島市朽木におけるトチ餅生産とトチノミ利用」 BIOSTORY 24:94-106.

林野庁 2012 「薪、木炭等の燃焼により生じる灰の食品の加工及び調理への利用自粛について」 http://www.rinya.maff.go.jp/j/tokuyou/shintan8.html (2016年3月18日閲覧).

【会計報告】

第 21 回（2015 年度）生態人類学会研究大会決算

収入項目		支出項目	
大会参加費	1,004,000	大会会場費、宿泊費	807,000
キャンセル料	6,000	二次会・茶菓	99,110
		アルバイト謝金	42,000
		往路交通費補助	55,000
		事務局交通費	3,760
		文房具、電池代	690
		学会会計への組み込み	2,440
	1,010,000		1,010,000

2015 年度生態人類学会決算

収入項目		支出項目	
2014 年度より繰越	879,213	学会ホームページ契約	4,050
利息	70	上記の振込手数料	270
研究大会からの組み込み	2,440	次期会長への振込手数料	432
計	881,723		4,752
2016 年度への繰越			876,971

会計監査：河合香吏、高倉浩樹

【インフォメーション】

第 21 回研究大会の報告

2016 年 3 月 22 日・23 日に北海道札幌市定山渓温泉（定山渓万世閣ホテルミリオーネ）にて研究大会を行いました。60 名の参加者のもと 12 題（口演 9 題、ポスター3 題）の研究発表があり、活発な議論がかわされました。

新入会員情報

2015 年度に新たに本学会に入会されたのは、以下の方々です（敬称略）。

岩谷洋史（神戸大学）、尾崎孝宏（鹿児島大学）、古藤あずさ（北九州市立大学）、関野文子（京都大学）、中井信介（佐賀大学）、フフアグラ（青山）（東北大学）

2016 年度の運営体制

2016 年度の役員には、以下の方々が選出されています（敬称略）。

会長：寺嶋秀明（神戸学院大学）

理事：卯田宗平（国立民族博物館）、小谷真吾（千葉大学）、木村大治（京都大学）、小松かおり（北海学園大学）、椎野若菜（東京外国語大学）、孫暁剛（京都大学）、中村美知夫（京都大学）、萩原潤（宮城大学）、古澤拓郎（京都大学）、松浦直毅（静岡県立大学）、丸山淳子（津田塾大学）、安岡宏和（京都大学）、山内太郎（北海道大学）

会計監査：河合香吏（東京外国語大学）、高倉浩樹（東北大学）

第 22 回研究大会のお知らせ

■日時：2017 年 3 月 17 日（金）～18 日（土）
17 日の 12:00 から受付、13:30 から研究大会開始の予定です。
研究大会終了は 18 日 12:00 の予定です。
■会場（17, 18 日の研究大会・宿泊）：
ホテルロイヤルヒル福知山＆スパ
〒620-0857 京都府福知山市字土師小字澤居山 176 番地
TEL. 0773-27-5000
WEBSITE:
http://www.royalhill-fukuchiyama.com/
■生態人類学会・京都事務局
京都大学アフリカ地域研究資料センター
安岡宏和・木村大治
※お問い合わせは、メールでお願いいたします。
ecoanth2016@gmail.com

【編集後記】

ニュースレターNo. 22 をお届けします。日本を含むアジア、オセアニア、アフリカ、ラテンアメリアをカバーするフィールド調査研究および研究方法論の 12 本の力作が掲載されています。寄稿いただいた発表者の皆様ありがとうございました。第 21 回研究大会＠札幌は遠い昔のように感じていましたが、論文に目を通しながら研究大会の情景が蘇ってきました。同時に、生態人類学の視野の広さ・深さにあらためて気付かされました。第 22 回研究大会は寺嶋新会長のもと福知山温泉です。多くの皆様のご参加と活発な議論を期待しています。

（山内太郎）